東遊三傳集 一

475

197
.E56
7045

茶之湯三傳集序

今夫茗ハ古人ノ傳謂食物之大義味苦而清頭目故心是ヲ主トル唐ニハ高貴仙家之翫ヒ和朝ニテモ尚諸侯太夫是用玉フ朋友交之随一ニシテ愛敬ヲ本トシ尊卑ヲヘダテズ下民トシテハ上ニ交為上ハ下ヲ捨ズ且四端之感ノミ又茶器ハ當代之弄ヒ高家富宥之大宝也故古昔珎器ヲ秀逸トス爰假世人是ヲ無用遊興之業トノミ思ヘリ其故ニ道有事ヲ不知我意ヲ以本意セリ嗚呼嘆哉五常之経アル事ヲ今此書三傳集ハ千宗易

利休居士古田織部正小堀遠州三代宗匠傳
来善之要ナル物ヲ頗蒐輯シテ以次序ヲ全
ク正明テ四巻トス世人是ヲ取バ一哭之媒
ト思ヘド是ハ愚之微意也見ニ人又此書ノ
中之萬一ヲ取テ補ヲ庶幾ト云爾

茶之湯三傳集巻之一

花之巻

花挿之事

花極之事

花客へ一步ゟ之事

賓花之事

移徙花之事

出陳花之事

花心之事

無花生之事

船之花乃事

花之枝爐の事

月之花盛之部

炭の部

三重〻大炭手前莊八川の事

四重〻寸炭手前の事

一重〻寸炭手前本儀手の事

一重〻寸右儀手炭手前の事

風爐炭手前の事

袋棚儀手莊の事

臺子炭手前の事

炉臺子時三莊の事

炭寸法の事

風爐炭の寸法之事

爐炭立塗の事

風爐立塗伏根円士黒寸法の事

釜吾紙寸法の事

炭〻根の事

白炭組根の事

炭爐の事

大入炭下置の事

大炭心得の事

右之序口之口伝事

甚深口決之事

花搦之事

一 花籠ニ多く花を入　水際　花切　ありこと
布を布さく四方ニ切四方端をひとして脇ニ垂くを
巾ひ又ハ落板木ニ水之落たる時ぬぐふ一き為なり
一 落板大床深サ三尺之時ハ床縁懸あるべき定一ヌ
此角落板之時之支度なり四方ハ其中小床の時ハ寸八ヌ
一 丸落板ハ大ハ十八ヌニ垂小丸うき板ハ十二ヌ四方ハ其中也
一 置花生之水指を此敷ニ二心得花くし葉くし水さハ八上
丁寸也一寸か法四る時ハ禁花なり
一 一花一葉四花四葉六 花六葉禁花なり
一 無花葉をふ生葉なき花をふ生 無枝時ハ花ニ葉

無母なたとへハ梅桃木ハ葉ハ花の盛ニなし加様なる物ハ心葉也葉の出ぬ先に花ざかり生る事悪し又梅ときハ紫きき梅木の花の有るまゝに加様の類ハ花の替りに生る事又是を見て葉ハなし

一 祝儀之花ハ定之通也客に依り生る事をたびたび見るにする人ニハ其花を用ゆべし常ハ禁ずる花之事細ニ從ふよハ嫌由なるべし

一 新花ハ定之通葉末に依て生る事又新宅祝に作事して出来しニハ其花を生べし新花ハ季を失ふ花也新花といふハたとへハ菊ハ九月が季なるを十月末ニ生る花ハ正ノ花ニハあらず初て花之色を祝なる也

一 花の縁切と云事ハたとへハ白き花をあまたかさねて宗き花と申ニたつるを縁を切と云也又下より縁を結ぶ事ならむすぶ事有加様なる所切者の大概

一 むかしハ花生なく三ヶ式花生の縁なかるべき花生ずる口を曲尺にて切る併花ニ依て三ヶ式なくして悪き事又是花ニ依る也一大形を祝之極て花の流よ難く葉なしがたき事又たとへハ水仙杜若なと草木の類ハ花なしがたき時ハ花咲き出す事多し加様の類葉なしがたく余ハ唯定之ニ

一 花長サハ寸尺を高く定むべし一尺花ニ一寸依るべきなたとへハ蓮花杜若杜丹水仙菊蘭加様なる類卑く

生る時ハ花生ふくし生花の段程ハ長ケ高き花
ハ高く生ケ卑く生て能花ハ卑く生るゝ當流の秘之

花嫌の事

一むくげ　ほうしの類　桃の類　茶の花　萩　荻
きんせん花　けいとう花　ばくろ　百合
類生て悪き　仙翁花　女郎花　桔梗　ゆり
きすゝき　花いばら　山うつぎ　こまきの花　ちとせ有
右生中を嫌ふ

花実口取用の事

一枝入ニ花生口水七八分程入て花を抜実入て枝
定て花葉ニ花を入指出不残する又ハ体におさめ

向て右の方ニ脇ニ主枝一ふらをする客花を生る流と
二番枝より生ていふをとよび続見する所を以て立花
きほめて花する之枝姿によりも又ハ客ハ二依て多く上
枝ニ花ハ下の方を生する事

客花の事

一おれ如く花偲て指る時ハ先程の花の移りをめ
ときりハ又ハいまゝ生方の先ハ二てとの此
帝王の花移ん位牢を観ていまを全て花の時節
時宜にして生れ申すを
一生花流枝の事　掛手の角桂ハ向桂ニ指せ
一実花ハ花とする所形かはるハ悪き之故ふ

筆先に花を揃様を紙合点してあやり生備よるる
ようしなからすゝハ下手の仕さざなりし

一 亭主の流枝ハ上座の角柱へ指てなりとなりし
に活し花の事

一 花生の内に白き色の花を活し其き花大事の
嫌ある夫の字を忘心くとも外ハ大事に吉とよりがし

出陣花の事

一 竹を立る由ハ為明になりて竹を切と立忘になりて
かし葉なりを随言各心をとりて

一 花をに構と月心につりてよらと生る故也

花心の事

一 木ともに葉を高く立る枝すゑを吉とす
菱山の紫葉のもけぞ志らさけ枝
春なりし小意人し乃事ハ

一 菱のよせんなどいとも外弱き花ハ吹切なりつ
言し俗路客のなそ文之呼んの客にハ弱とく切て水に
生しなく枝くべし

一 生して水さハ橋へたん通柳に根をなれの乱きたる根を生る
がすり一なりて

一 水鉢逆のの花の水にいれて杜若の花の数ハ水さハに
ある事一花生大口の紙く余の花ハ根なすの乱事と
きろふなりての道の仕ハ家に一ぶかしと三一ぶとりぶ

たてゝ生る事なり水色ハ心之光と奥儀の明らと云迄

一 河骨花生様の事ハむかし廣口花生せ常ハ花ハ水の内へ
さがる事ときらへ氏共花ハ一二寸らん水中へ入て生る子細
ハ水色ハ曲へ水に交る心之趣にして生花ハ心が加様
故也之共ハ河骨ハ花を切たるハ弱くして葉も一ぽんも
手ニ散ニ水中へ根に入れよせらる花を生る様口伝在

一 のふせんかつら生るハ生るとも花むらさきくりて
高く入て必らず花おもの也ハ千曲へ花ノ表裏ハ枝葉を
一本花にして各一しさらくとハ花も高く落るく

一 石竹の花ハ一二寸らん生るてハせん事を花おもてハ中へくいら
ほづれ丸交へ花ノ中へ入くあけさげとしてくる也

梅三竹の伏などにして生る事もあるほど沢山に生
たるよし花生ニ廣口ほと生様也

一 びんひの花明とハびんひハ二ぶまで多くと花すすめを
まく生る時ハ花生の内も多くし故に花をためて
しそ河きも花ハ花の不河き処をもとき捨
花ども生る之

一 水仙の花葉ニ葉明水仙ハ一本花立之ハ生花の道
理ニ遠故能花をも丸交へ葉も能程ニ高く人も多
花生ハ三人へ葉明ハ葉の足ず程ニおびらどもして長き
叶ハ小刀の山をかしこき之ハ心の足ず程ニあるも也

一 葉自蘭の花葉ニ明付花ハ花高ハ立のび為花

グ如くつきて悪し 蕊根を切て花を上ちゝを杯し
こみ花の手ぎはを能〻に入る胡下を后くよして
出す葉ハ水際のとくすべし
一 停春出す揺ハ花の手き洞くして弱き也故ニ正
花ニハ難識物の應言答にして宜し
一 停勝せうびんかの類ならハいからぬ出す

縦花生の事

一 上へ直下へ流きくならし縦へつる〈筒〉ハ悪く候
縦ハ分へ出たる枝よ出す
一 恭して縦花入ニハ字の竹の肩の外ハ竹の小口を
水ちかくよ竹の胴をかくまいましく

一 籠の花生ハ竹へ竹の節を仕込也又ハ曲物を楊入
一 籠の花生を置花ニする時ハ枝をかしに生め直也
小体ハ半ニ置枝を低し真中籠ハ大なる宜し
一 掛花入ニ一重切二重切又ハ中竹ハ一重切の輪より上へ
出し竹の前にしの枝之末くしハ悪し上へ直ニ輪の内を
立枝又ハ大き嫌く
一 二重切ニ花生るニ上下ニ生る枝は手縁ハ上を宴
流して客の之流し下を據手はりて流を生を
あまかりしと納く
一 二重切ニ三重切有ぜ何上段高き花を出して除こ
早きこるか出る

一 二重切を二人して生る時ハ上の花を水ぎハ上
の花ハ切前に生るべし
一 竹の筒を下に置て生るもの有此時ハ花台の卓
の様なるものに置べし 床板に置ハ悪し
一 掛物掛花を生るハ二重又ハ花生の口へ置付てハ
一 掛花生に八寸一二寸の花を掛るもよろしく口
一 つり花籠にも口清
一 のうれんかづら 木通 風車 のうれん花の類ハ
一 三生る竹へ角上へ高く生て外の花ハ下花入の口へ
一 あしく此竹下へさげる花ハ数がよし
一 掛花生に入て外花ハ 梅 椿 黄梅 薄坊

のうぜん花 連翹 杜丹 海桃 石竹
姫ゆり草、芙蓉の類 菊 萩 東菊 風車
のうせんかづら 朝顔 ぎぼうし 鉄線 さくらさう
秋草の類 ちぐん花 水仙 寒菊 あけびの花

船の花の事

一 船の口に出舟 帆ハ入舟に生る船ハ帆を出すと云
一 入舟の花ハ舟を出すと也 此時ハ二ツの舟を入とする也
一 出舟の花入定日ハ月十五日より八月中計ハ出舟
一 出舟の花ハ舟乃縁より下へさげる時又帆にする
一 出舟の花ハ舟に水を入一しほを帆にいて生る也
舟を上る時ハ自ら帆を出して外の花ハ

一大き成舟ニハおりくと大きなる花をきるなりと見え
出舟入舟ハ心肝要なり
一乗舟ニ入て能花　美人芥子　桜草　きんさく
富士撫子　停株　りんひ　山吹　すゝけ　てまり
きまん　ぎらん草　のこ切草　庭桜　石竹
姫由り　萎菊ハ葉なく　阿弥陀草　姫なでしこ
岩菊　白蘭　紫菜　くちば　梅ぎく　銭巻
苔水仙　鷺草　鳥翁子　日扇子　かきつばた
はなし　かきとくさ　かせん　香蘭　百日紅
白だん生　菊だまし　ぎぼうし　いろく　さつまなでしこ
えんきく　きりひとは　吉祥草　秋菊

太かわ柳の類也せしで花のうつりに依て生て能
思ひきる尺合大古文の事なり
一卑下の花ニ習ふ花生も小きなる花を卑しき
舟の外へ出る根ニ生る花も小形ニ生るなるなり
一舟を花臺ニ乗舟ニして生る古文なり　釣舟之八違
置花入の心ニ真中ニ流しを定て生おくなり
一大き成口の花生ニハ生て能物有
花菖蒲　杜若　石竹　牡丹　芍薬
菊　連花　川骨　ぎぼうし　水あふひ　橋藪
梅　ゆり　とく　かしの花
右之様なる花ハ花生の口の大きなる数ニ生て見よし

花ニ依テ細口ニ生テ能花有花合ガ大事之口伝

花之枝嫌フ事

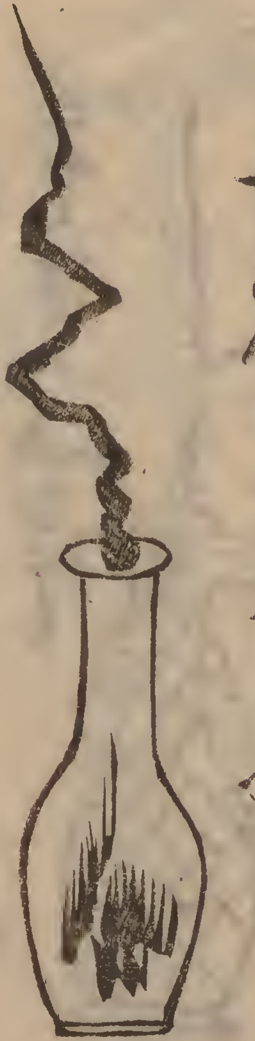
身をとがひすゝ心として大きをいむなり

絶合として嫌ふ也

ちゞこびとしてきらふ也

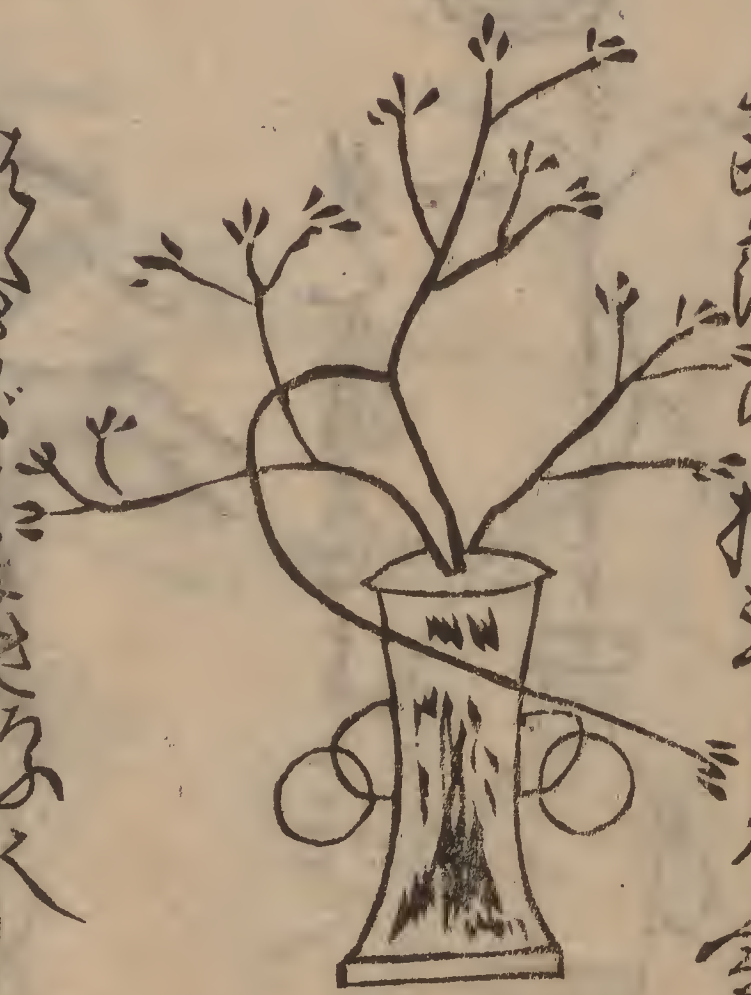
うちへ向きとして嫌ふ也

天をさゝゑ心として嫌ふ也

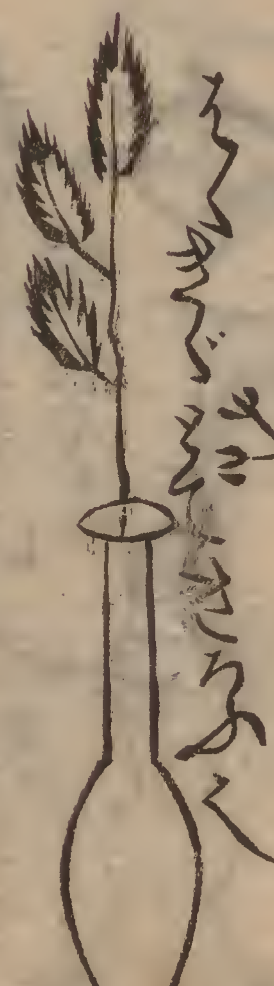


病心として大き嫌ふ也

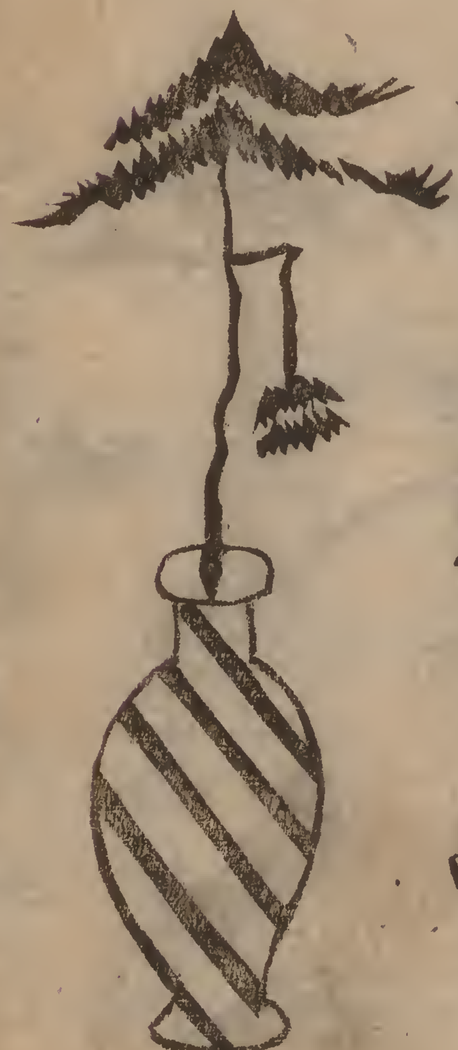
弓筈心として嫌ふ也



露落の枝としてきらふ也

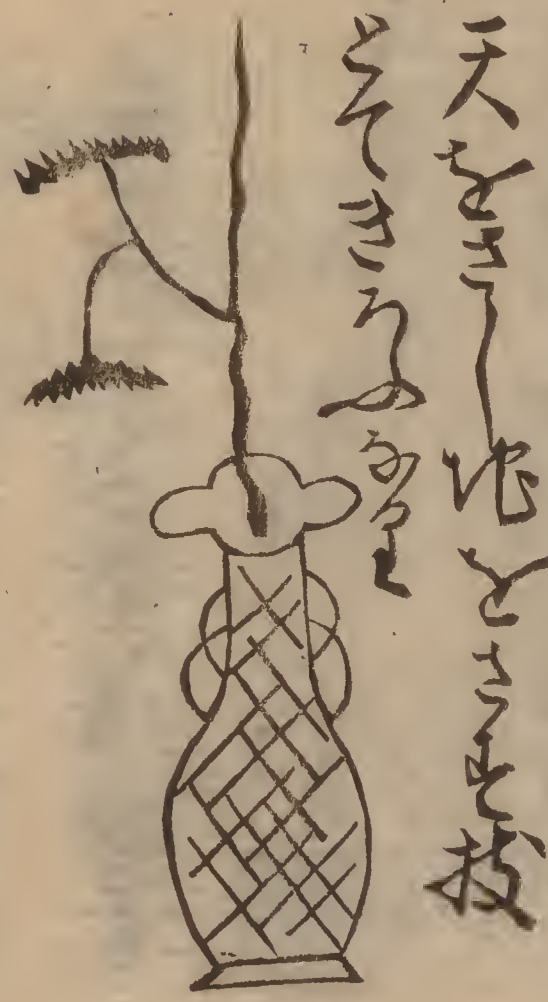


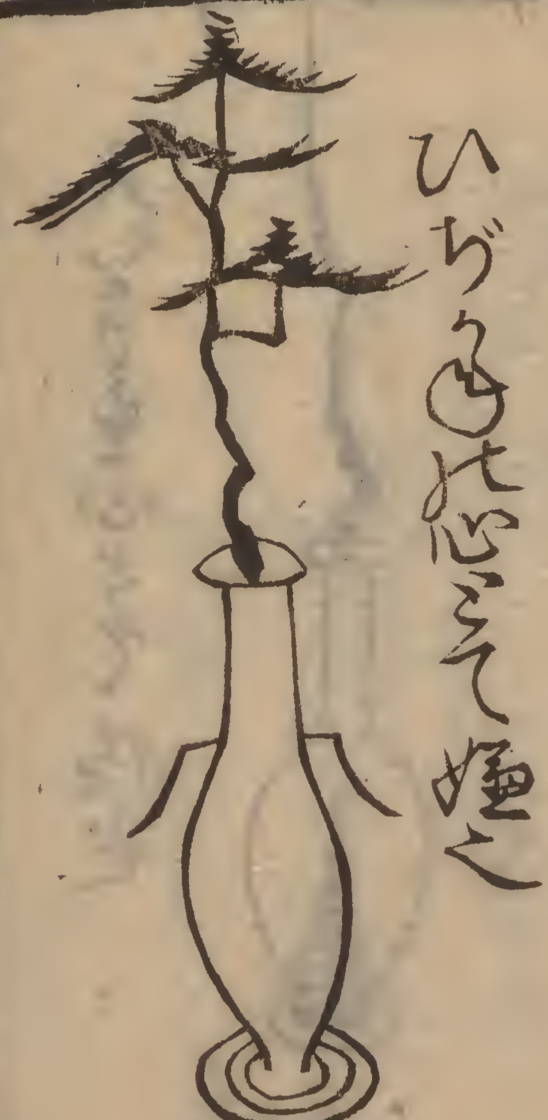
くきさゝへとしてきらふ也

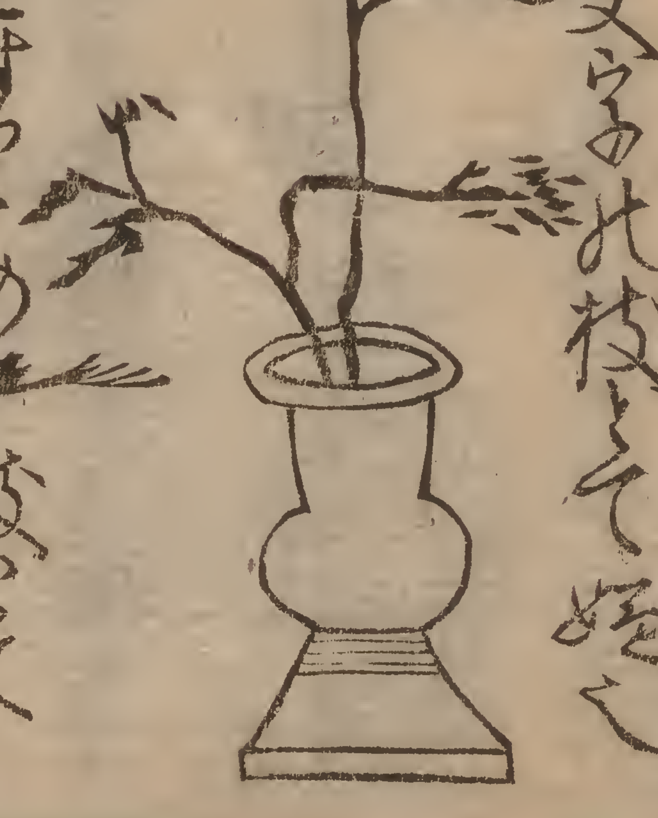


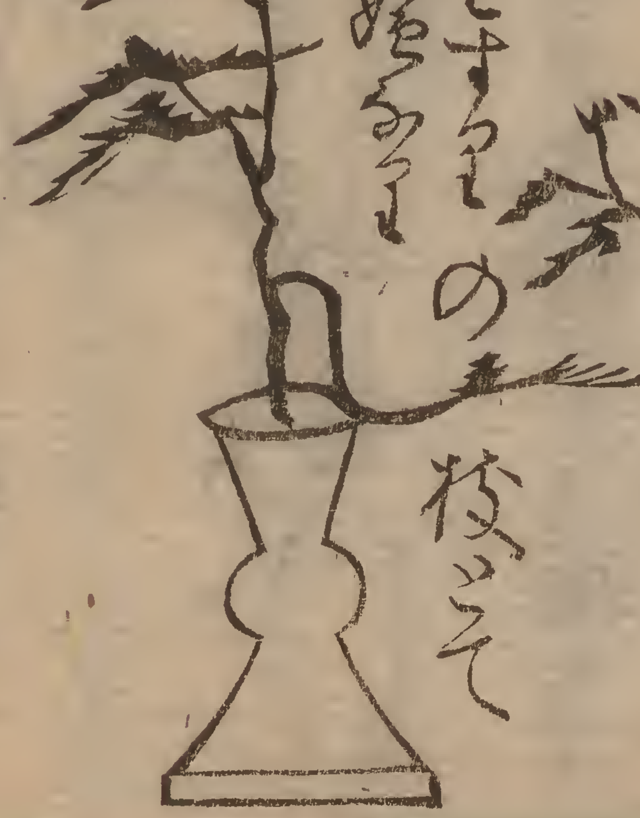
地をさゝゑ枝として嫌ふ也

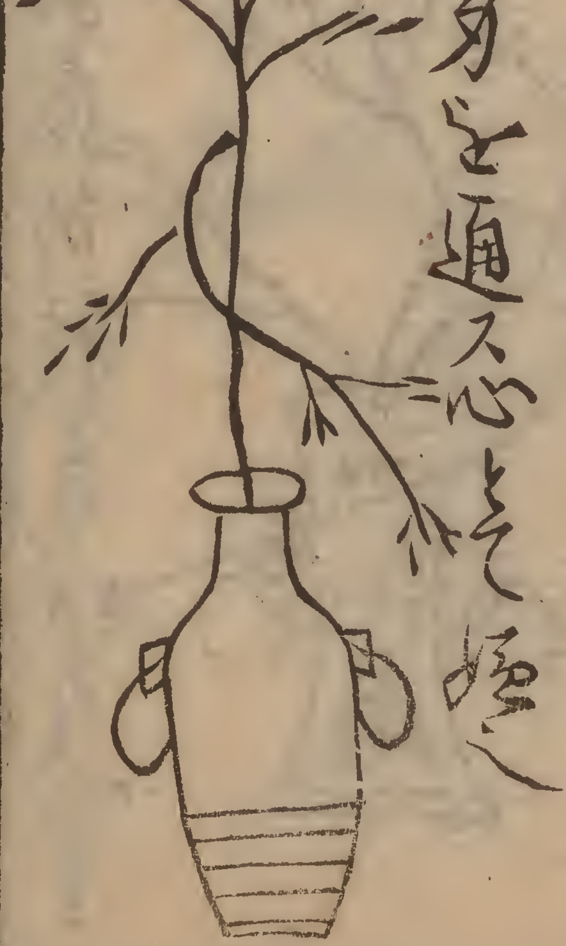
ひかきこそ嫌ふなり

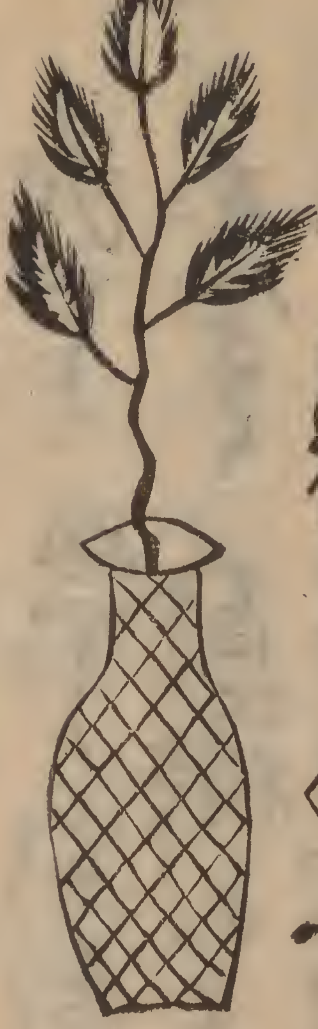

天をさし地をさゝる枝
とそきらふなり

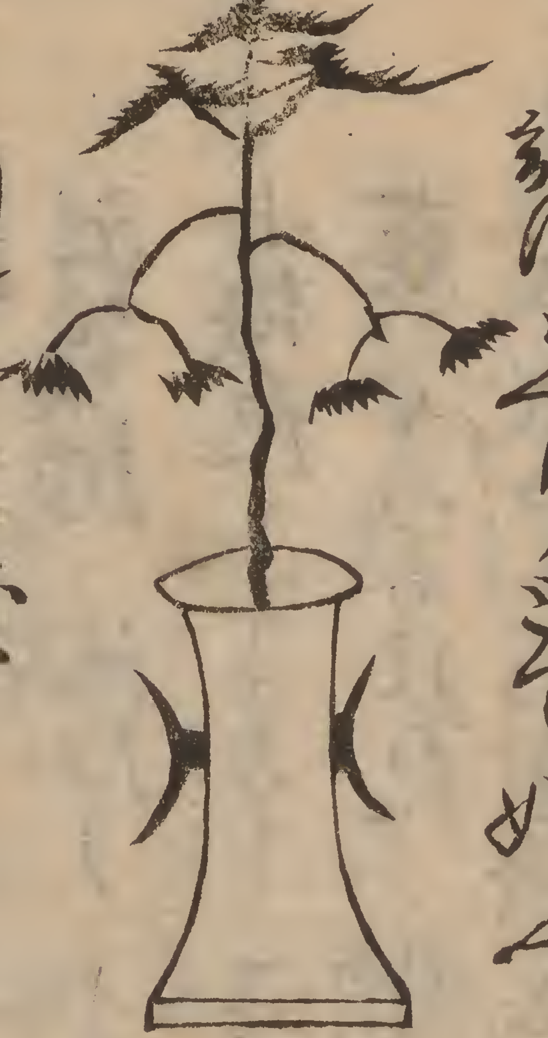

ひかゑ此心こそ嫌之

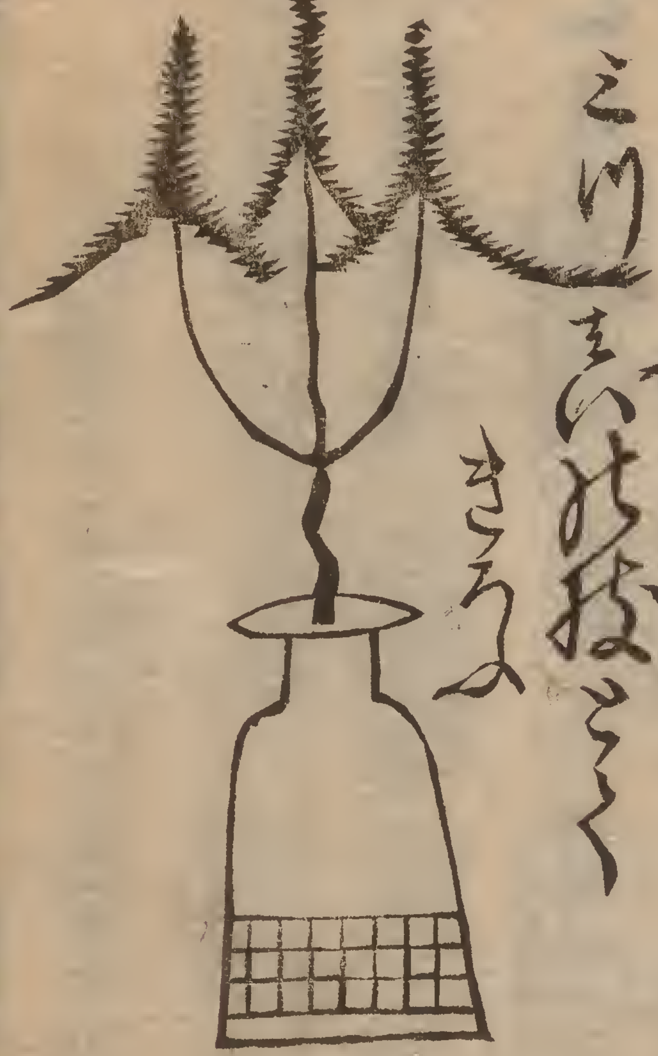

十文字此枝こそ嫌く


花生をするの
嫌ふなり
枝こそ


身を通ス心こそ嫌之


まへ此枝こそ嫌ふよ


乳川ふりこそ嫌ふよ


三川まい此枝こそ
きらふ

ひきさす文字切
ちゝへ御田さそ
こそ大きよ
きらふ

月々花盛之部

正月 梅 朔日草 ふくはく草とも ふくじゆ草とも 椿 黄連之花 二月至ル

二月 黄梅 蘇枋 かいこ花 さくら草 れんさく 七重花

三月 連翹 さくら 木蓮花 桃色 たんぽく

躑躅花 海たう 金鳳花 此一月ニ至 小米花

小梅花 小てまり 馬酔木花 沈丁花 てんに花

藤 かきつ花 我妻菊

四月 美人芥子 桜草 牡丹 芍薬 長春 こぬかし

びやう ぬかり 白丁花 まさき うつぎ

えんきく 罌栗子 げんひ ほけ さうび 一八 宍

すゞかけてまり 麻菊 けまん むつらん草 卯花

きし花 花菖蒲 杜若 いちはつ 庭桜 石竹

五月 姫百合 鬼百合 さゝ百合 あさき草 姫らん草

のき切草 九輪 岩藤 はつひ 唐はつひ さうひ

はさゝ 自蘭 紫蘭 川骨 くら葉 美人草

くちなし花 川原撫子

六月 凌霄 すいかづら 陽香金山 ききやう 野らん 小紫

白一文字 萬龜 一文字 大紫 朔小 大黄 泥墨

ひらうじひ てりこ わかくさ 九重 七重 金目貝

沢目貝 金基 菊鋏

鶏頭でゝこ 荒る 梅ぐさ 凌霄花 こぶし

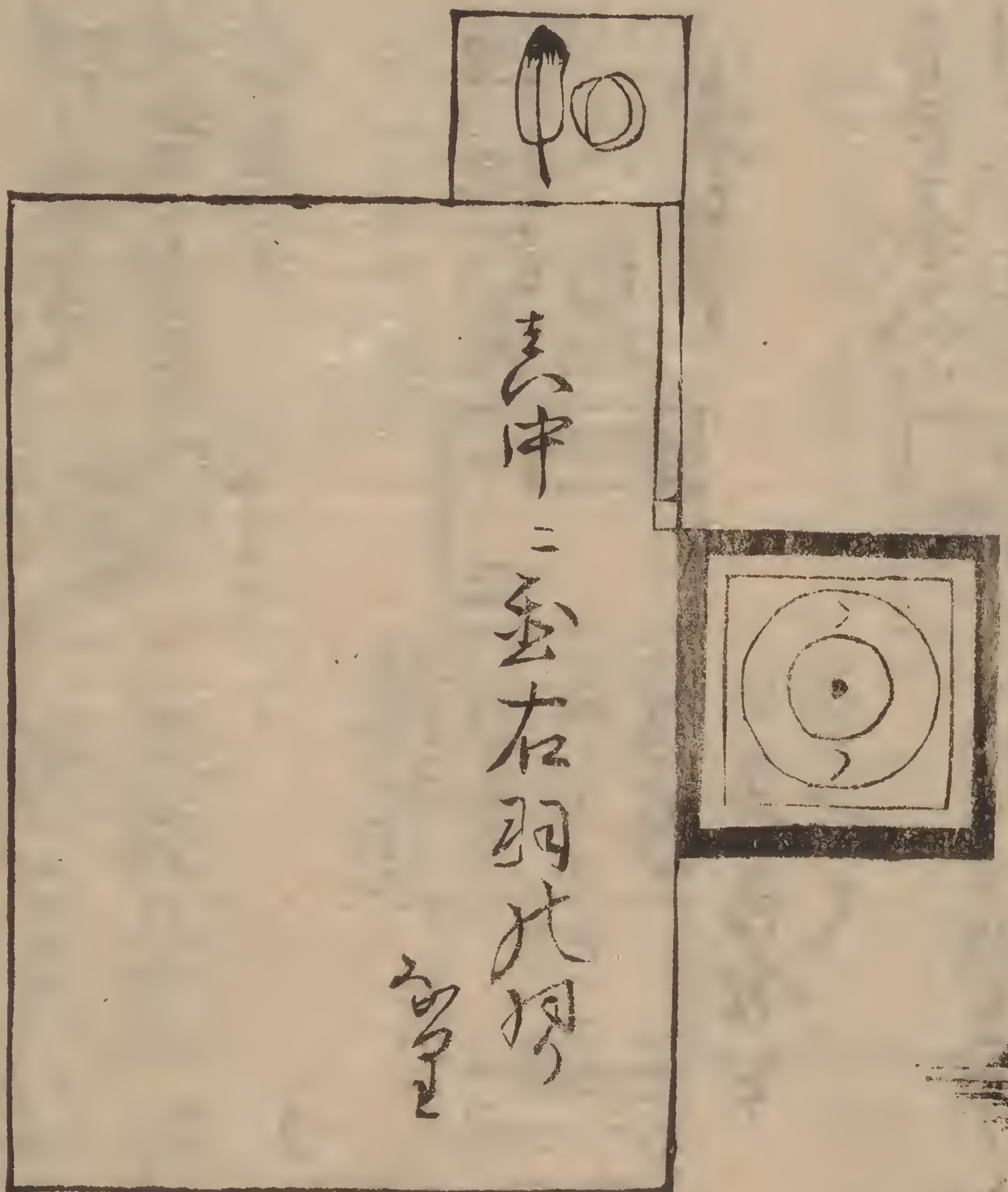
風車 夏水仙 蝉谷 蓮花 鷺草 烏扇子

はちす 下野 はるし 目扇子 はまゆふ

てつせん 香炉 百日紅

七月 仙翁花(せんおうけ) 朝顔(あさがほ) 白だん生 小車花(おぐるま) をみなへし
ぎぼしいろく ひるがほ すまうがも 朝顔に似たり
八月 さくらんたう こんきく きくらいぶう 水引の ひ
はま
狂々 六代 やまぶき ほとときす 大菊
九月 まんだらけ 秋菊大咲分 小咲分 鶏頭 ここでも 大白
しまきく 沢桔梗 楊貴妃 長月 奥州 紅この 茶
梅もどき 葉鶏頭 紅きく 小菊 しろぎく 小白 大白
ひいらぎ 大よもぎ 天然 かよ
ことしきく こも 川
十月 残菊 茶山花 水仙 椿 子梅 かみは
十一月 椿 茶山花 梅 水仙 寒菊
十二月 寒菊 寒咲 白梅 梅 水仙 椿

一 炭次第
三 ツ画 大炭 お置合 八川 ろ

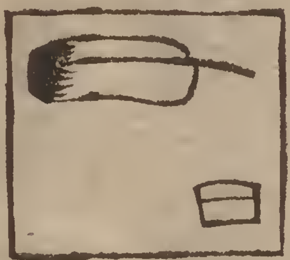


鐶ハ中ニ左
羽箒ハ香合せ
重ねてよし

鐶棚の角
の極ニ向様
ニ重ねてよし

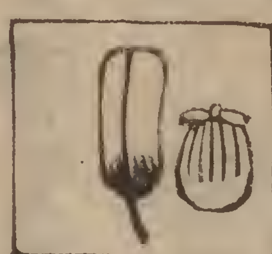
古き茶入の
時ハ中ニ置
太羽箒
[illegible]

鐶を角棚向様ニ
太羽の荘如此よし



拝領の
羽箒
を向ニ
据置
其名香合を
置合べし

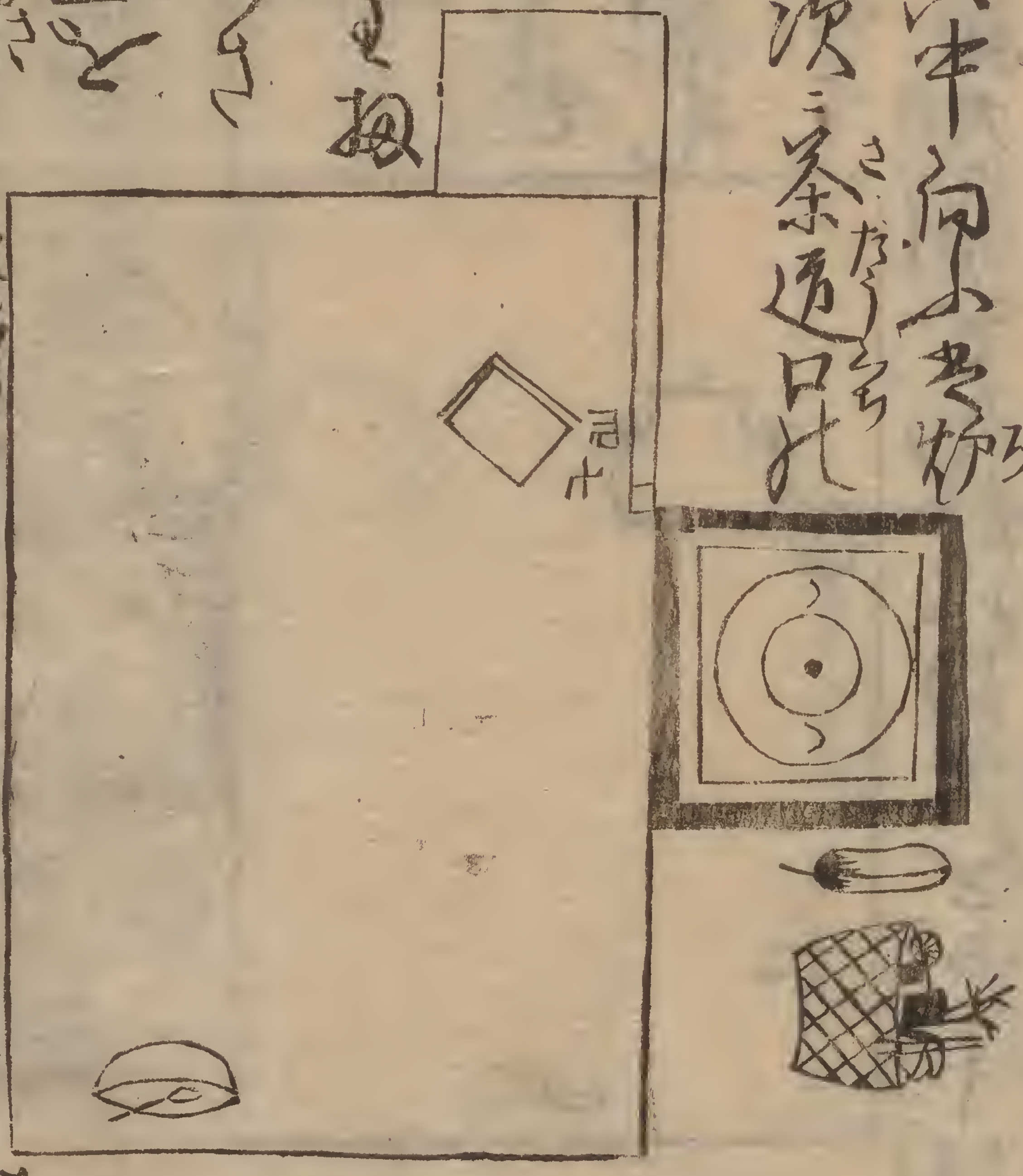
拝領の羽箒
古き香合の
置合



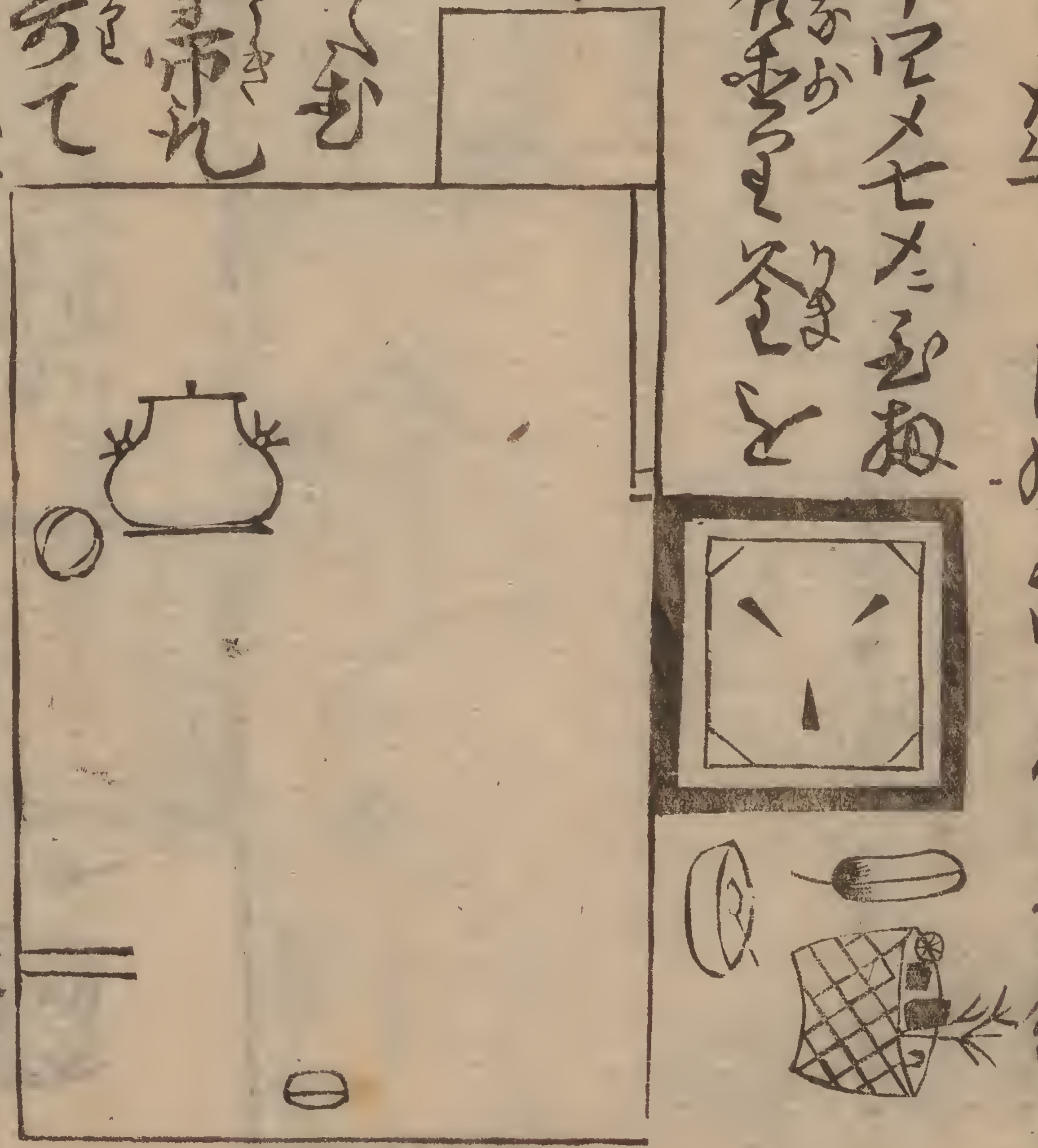
古キ中ニ羽箒を置新
茶入をハ少片寄て置
べし

三重之大炭之事

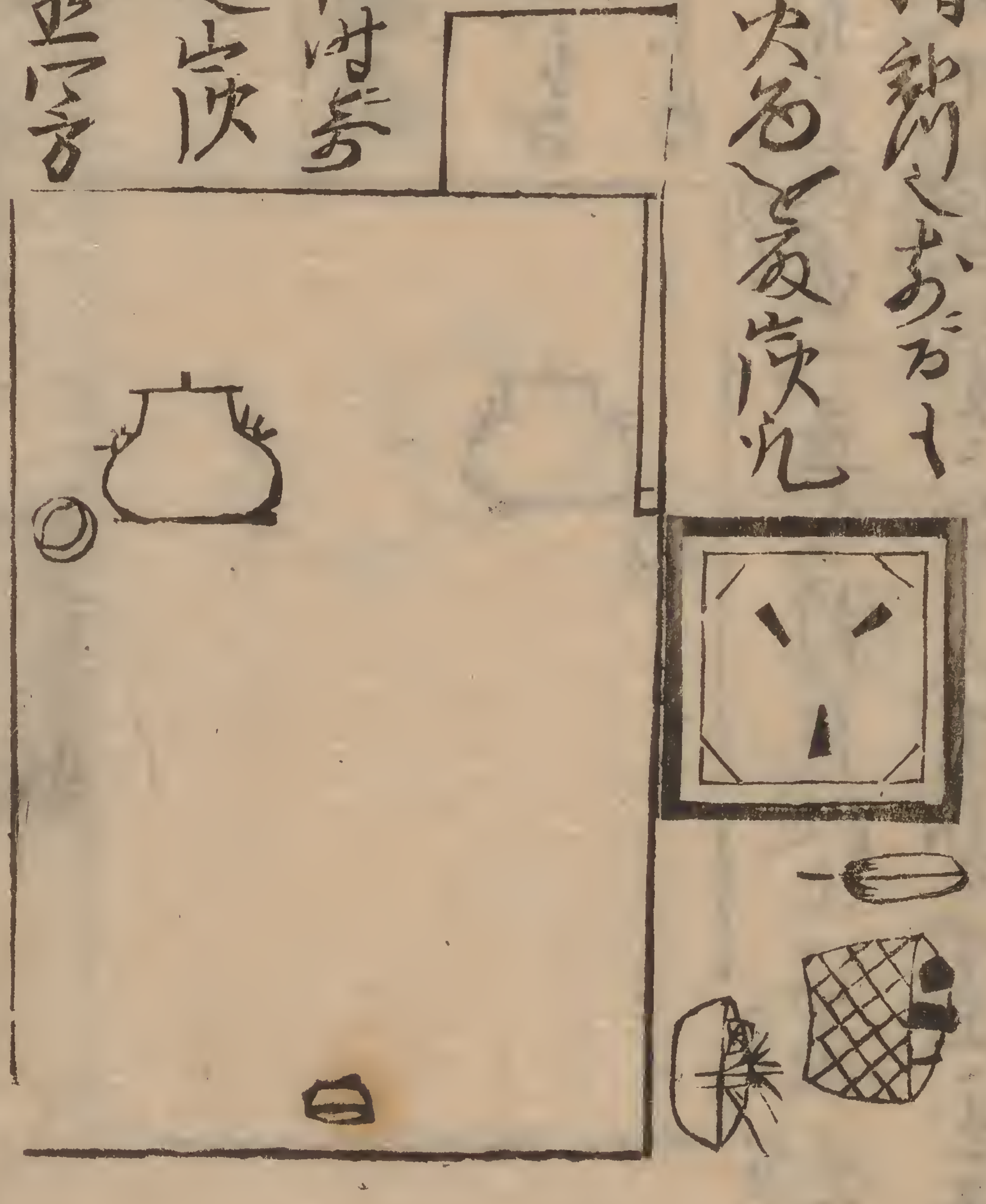
一炭斗の荘かくのごとし先炭入を指出
しきかくのを半向ふ手炉
縁の通ニ置次ニ茶道口の
たて付へ土瓶を
入おくせ羽箒の
口とむる釜を据
釜ニ向ひぬくさき
とれ出し蓋を
まへ帛巾と納め羽箒をとれ釜の蓋掛ひ
羽箒の先を出し輪と炭斗の下ニ双て



置せ次ニ香合を丸卓ノ口ノ真中後ニ釜鐶とそへて置
茶巾を丸卓ノ上ニ〆七メ二釜を据
釜を上ニ置居香合も釜を
二ケ二つくべき八此
方へずらせ鐶
をはづし爐縁ニ置く釜
又爐ニ向ひ羽箒にて
縁を掃時ある事て
炭は流しにある也火箸をもつて炉の内の火をなをし後へ
よ火箸遣ひ毎ニお椀をもち手ニて土鍋を丸爐縁此
き八へ寄て炉中へよく灰をまく灰炭入れ此脇置



取よ釜据えて白炭爐灰細すくれと土鍋へ流し据
置すると指指鉄とおかも
向ふしく釜据火箸と灰炭丸
此内炭と炉此
内除合の合れ
それ炭取く炉附る
割炭しく釜之炭
仕上たる時り出す
此時八点前丸口傍茶筅を置まくれたげきあと火を炭
く付るニ釜之ヘ茶事あり香合を見て釜の口上見て置
数ハ四方へ置く又八根と向一五尺く每茶を口唱



土鍋出し炭入出し羽箒入て鐶とりき次に腕
とりきを置き爪をとりきを置き棚に
角にし羽箒掛炭取に
終て蓋を取ら
香合置き釜を
向ひ帳巾にて蓋取
湯かげんとるかは
其ハ蓋を先しめ
扇子を入り持手へ立て行の上に蓋を置て茶筅
釜かきとおろして撥子の釜にかけて置蓋置取おに
置火釜吹くし蓋取す下に移し水をさす

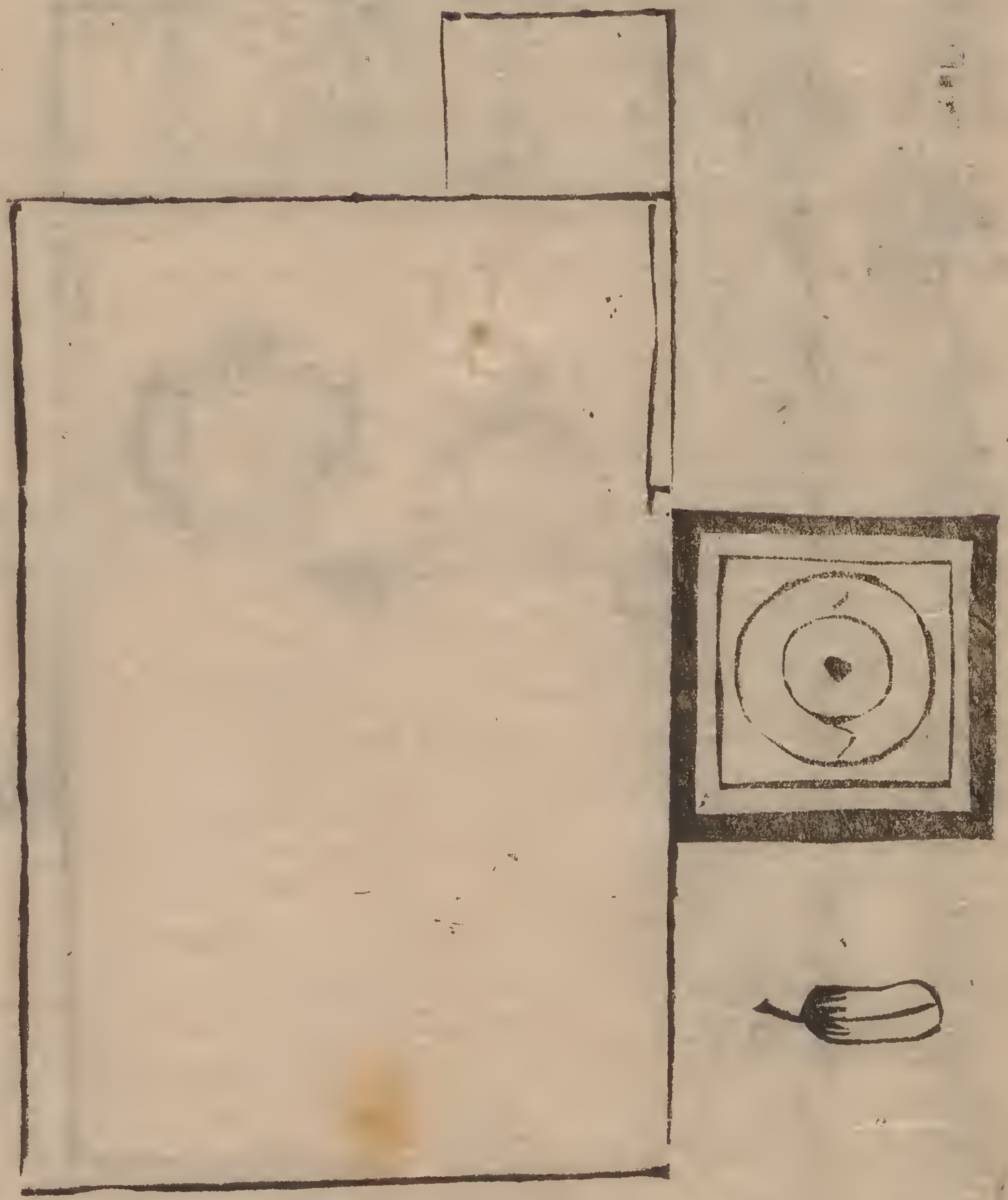
右のごとく請ての口傳下に置釜帳にし
釜口は内巾ひ釜の蓋置
中にし帳ひ蓋しめつまを
左にし茶巾を釜
之に置中に仕
是内口傳出へ出し
鐶かけ本柱にきは
右炉に向ひ釜
とい先客とるところ入り釜を座しまり
鐶を置ひ口傳の陰をはし陰は左に羽箒
て大目の内をきして撥子へ入れ羽又おいて

帨巾にて炉縁をふき改て釜をぬぐひかけて

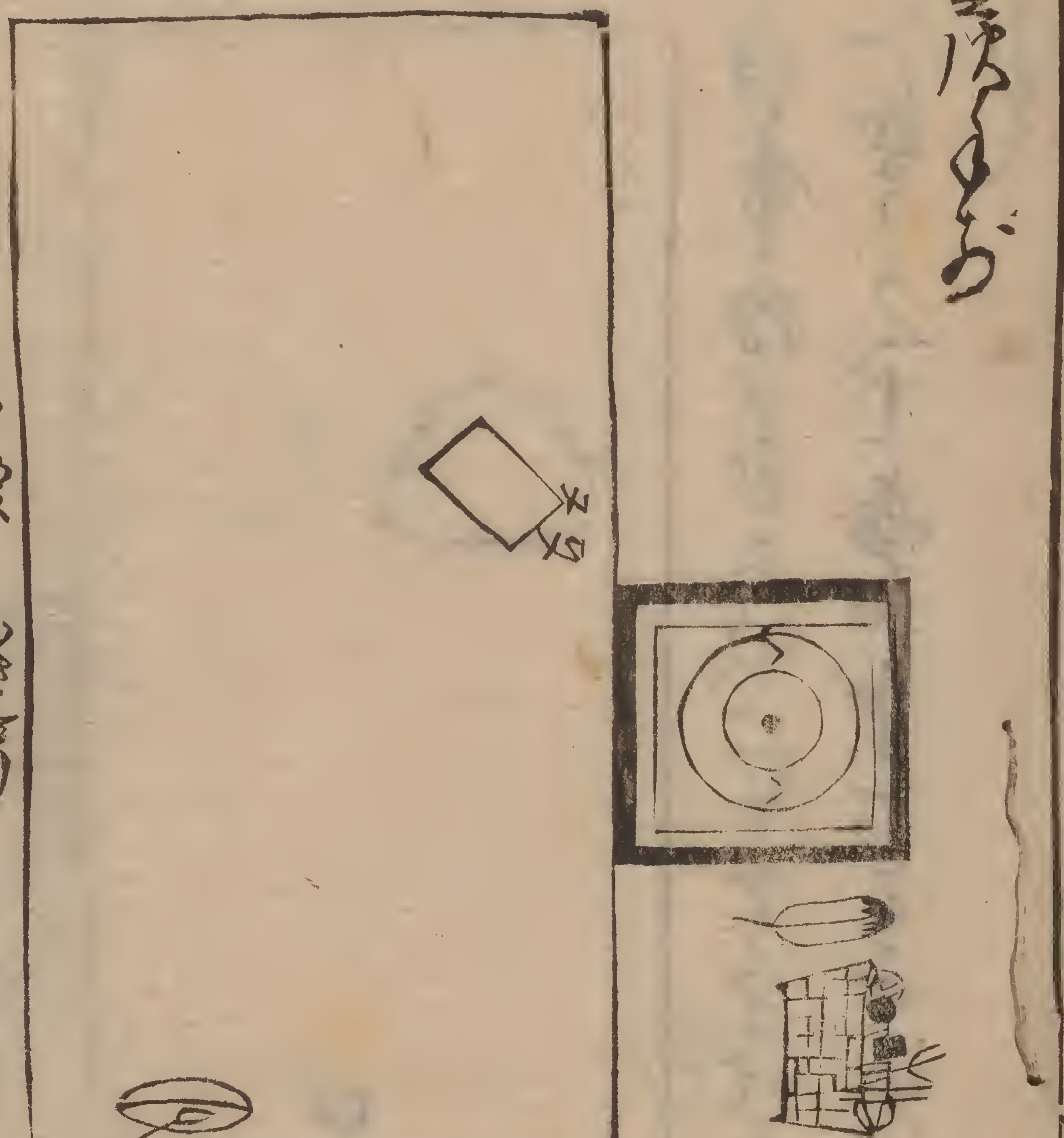
香合をとき客のまへ香合の蓋をとりて入子をとりて

時亭主は炭入を持て炉縁に敷紙を様に勝手へ次

第二一客中を拝見有之口伝



四畳半炭手前

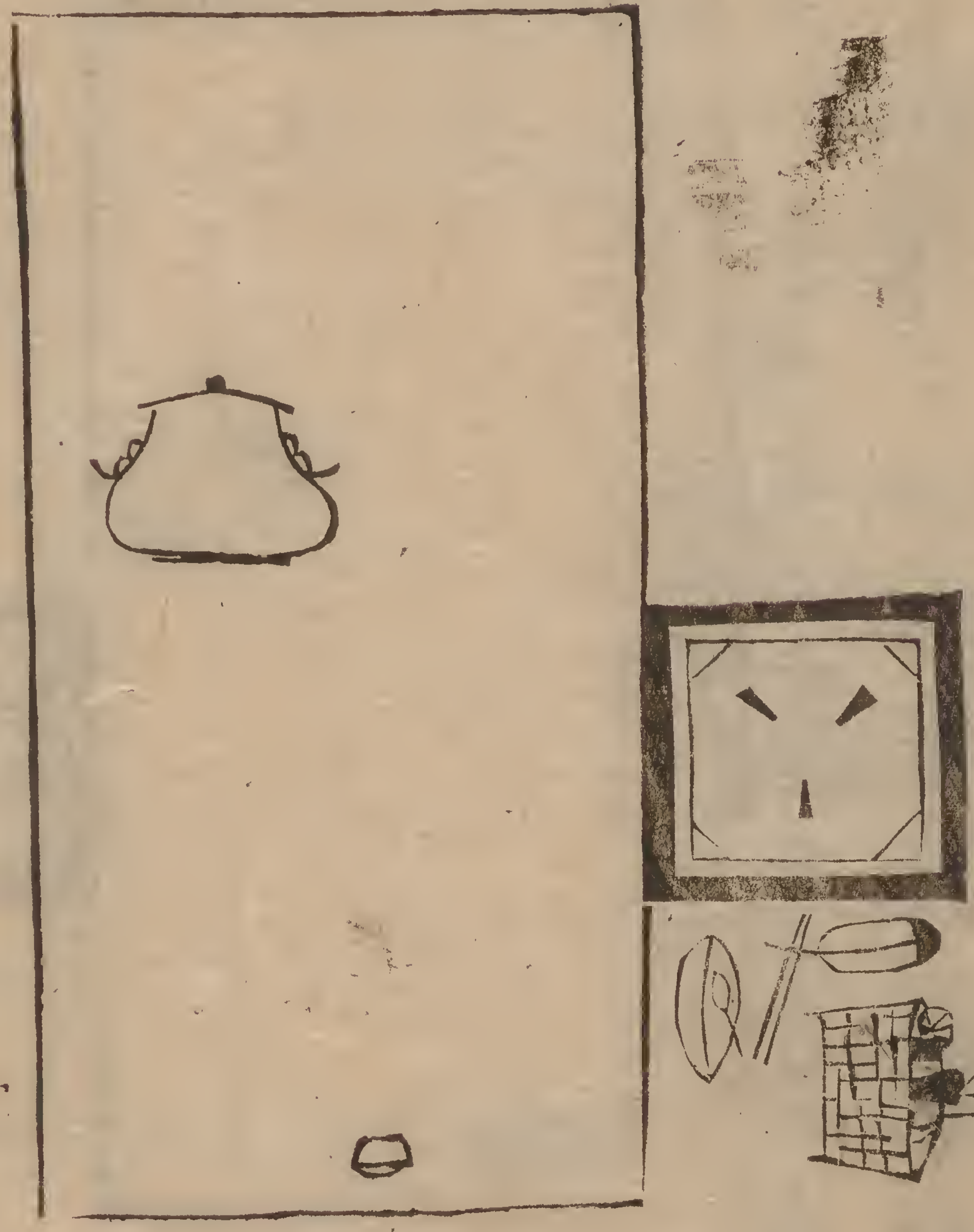


一 炭入炉縁一ツにならへ置敷紙に炭置所六メ三メ一メと見る之

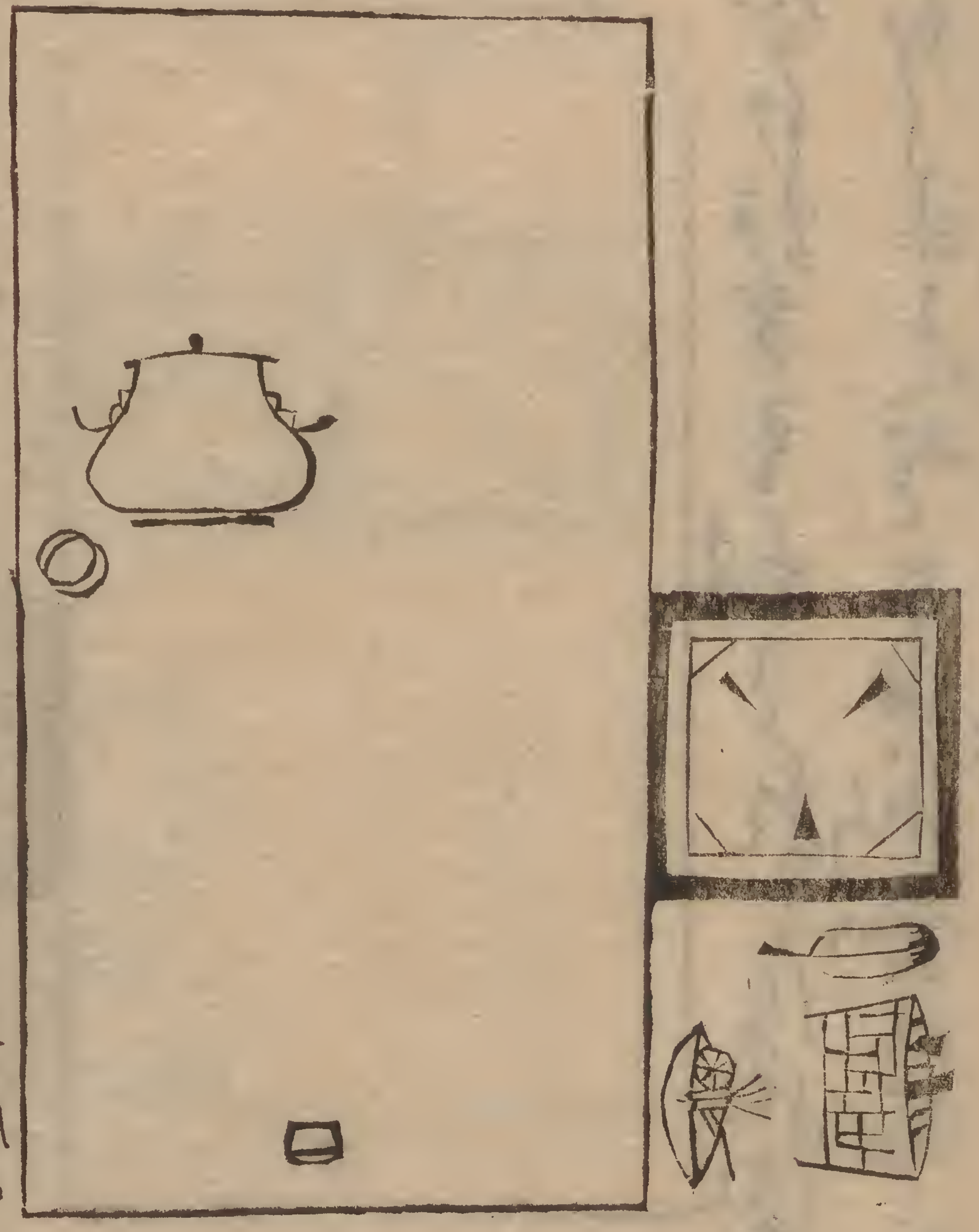
羽帚と香合を向へ炉縁一ツならへ炭入と炉縁との間に

是土鍋置なり

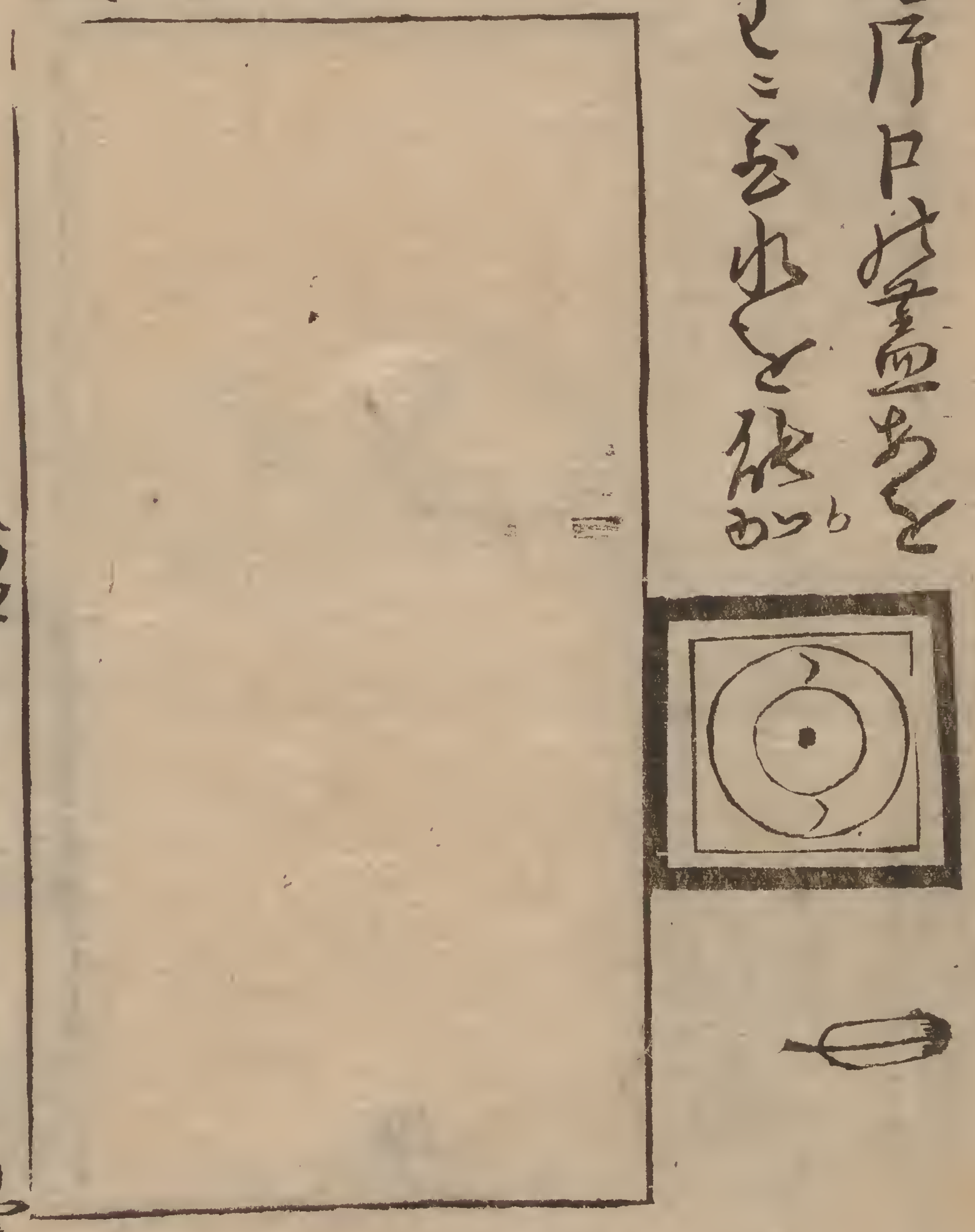
右の前のごとく羽帚掛せる右敷ハ四方に置く宝此台盆
ハ座紙のある故之炭斗又も焙炉台ハ三角に置大也如
く湯に立つけ也



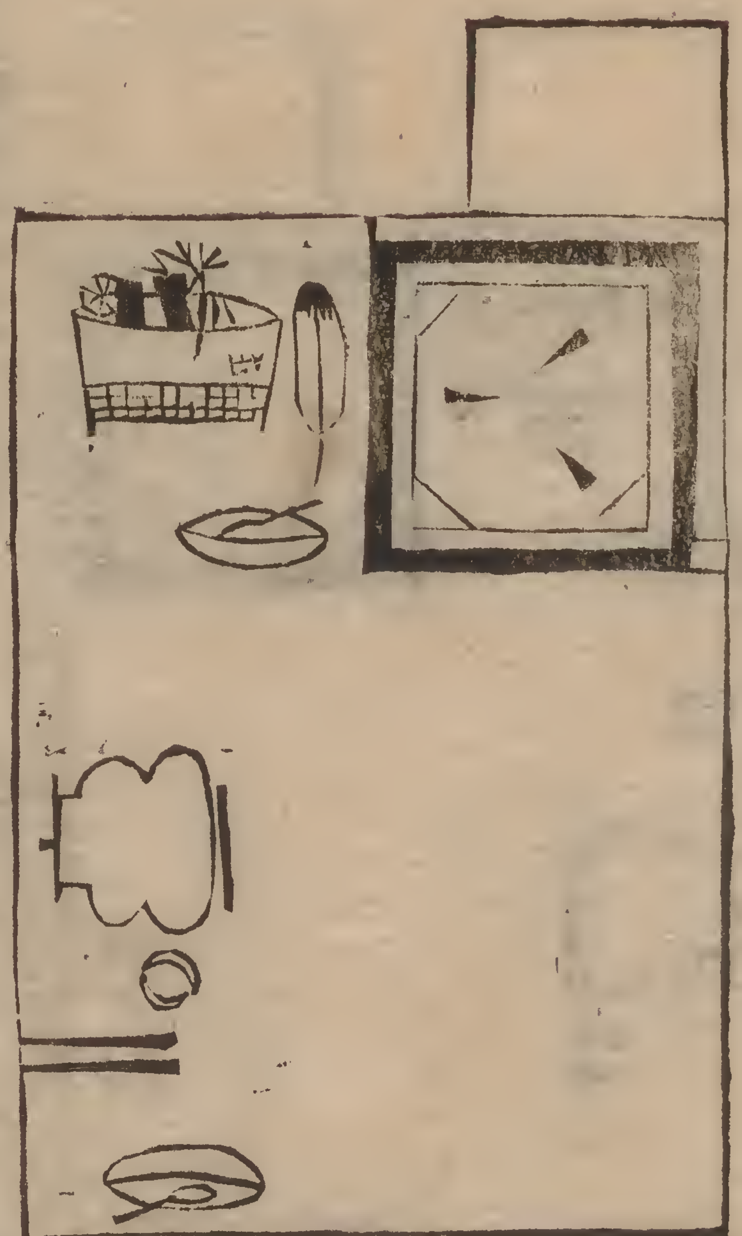
炭火置候之事大ニかぎらず炭出し炭仕廻香合
出し炭入置釜を掛て其をし釜は湯かげんとみ
又勝手へ入行ロニ有し水を入行湯釜を拭て出し掛置て



釜をと壺おきしさきおさハさら釜ぬきて
三釜の蓋乃所口に水指蓋をと
のけ釜をのせさる事に火を継加ふ
炭入て
一 釜をと釜を懐紙にて
中ハ釜の蓋
し所口の蓋
をとして勝手へ
つりハしらんとけ炉をきさ見に座りて[illegible]の仕様に
手を大に持する事し未まへ取と手毎ハ水盥の場に流し巾
釜の合のひしりて取をの付る時蓋をとるべく

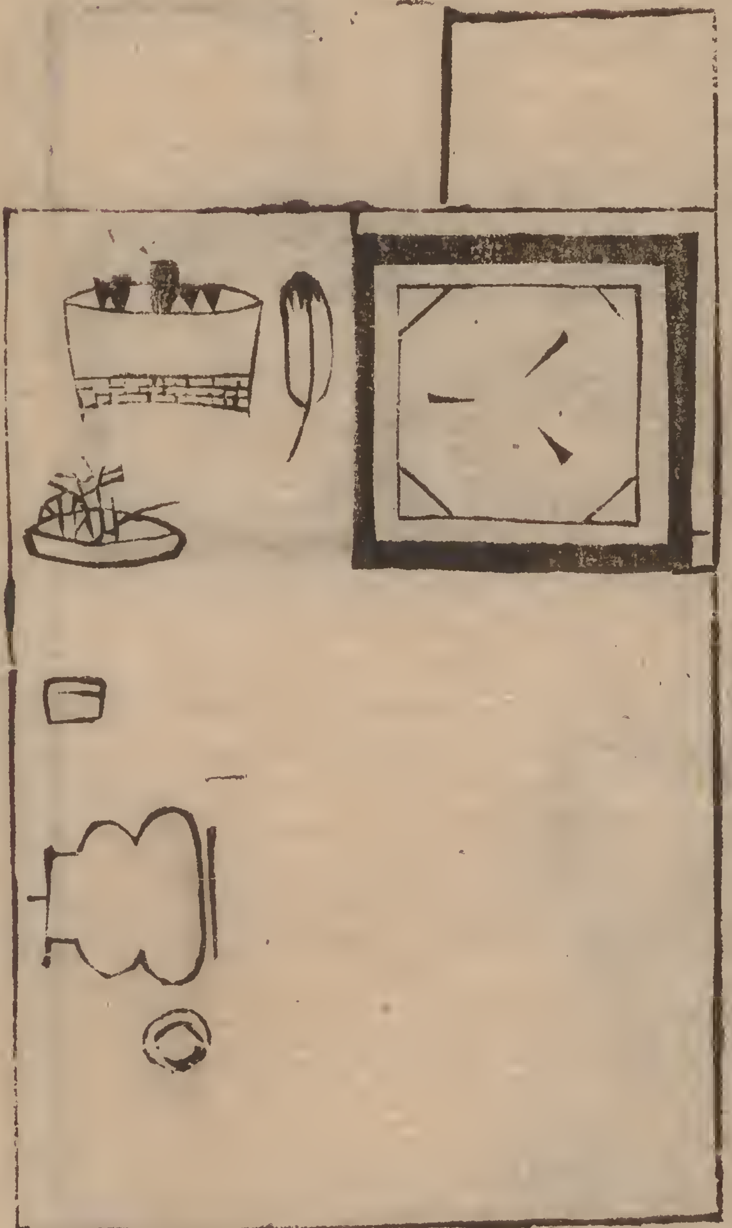


一 後の炭手前の次第
客の方

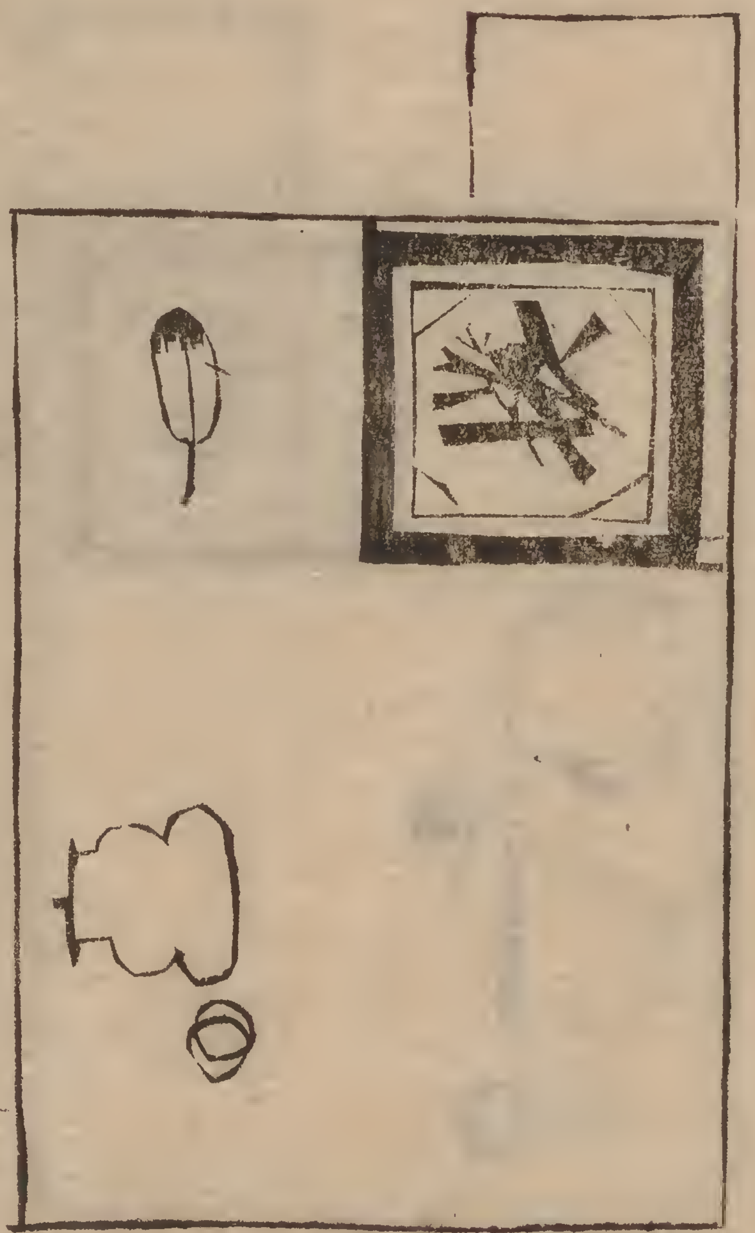


一 掛物ハ茶を掛て此方へ上る又ハ床の間大目を
釜ハ炉へ上ミ方より入河を申へ[illegible]とこれ
炭出し先釜をとりけ毎茶所口角に一ツの茶の炭斗

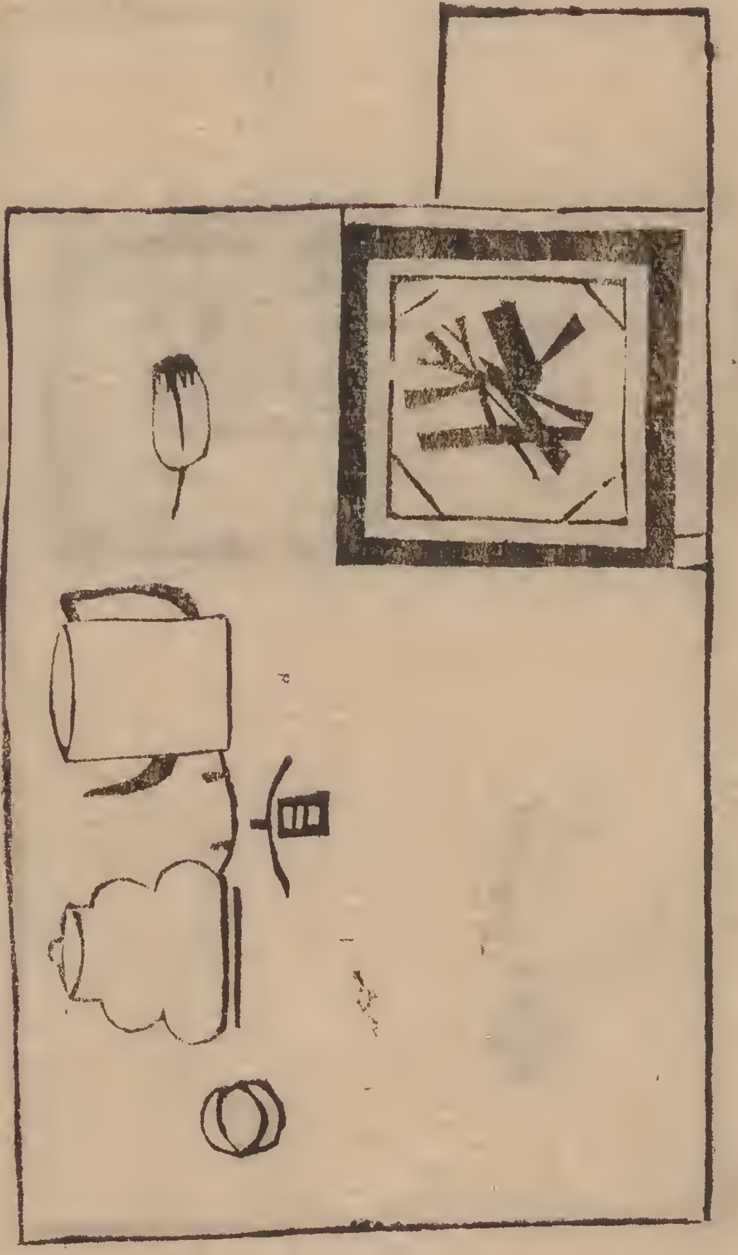
入り茶をとり上置き揃して一度手に入茶碗に入れ
置きし夫より茶巾を切り茶筅にて茶はしと箸ちまると
一服済し香炉をはき不侘炉かたしへし又たゝみへ上置きまくと
有時は侘びへし釜をかけ置炉辺ひすくきす後
少し置きて是をはくはくよりちりを



炭俵を香合を用意へ出し炭入出し鐶にて釜をへ
取入羽帚にて畳きれいに掃除後火箸を以て掛けひ羽帚を
出し肩付ぬく茶杓を茶碗に入て蓋をあけ湯を汲んと
見て蓋をしめ揚茶入へ入片口を持出す

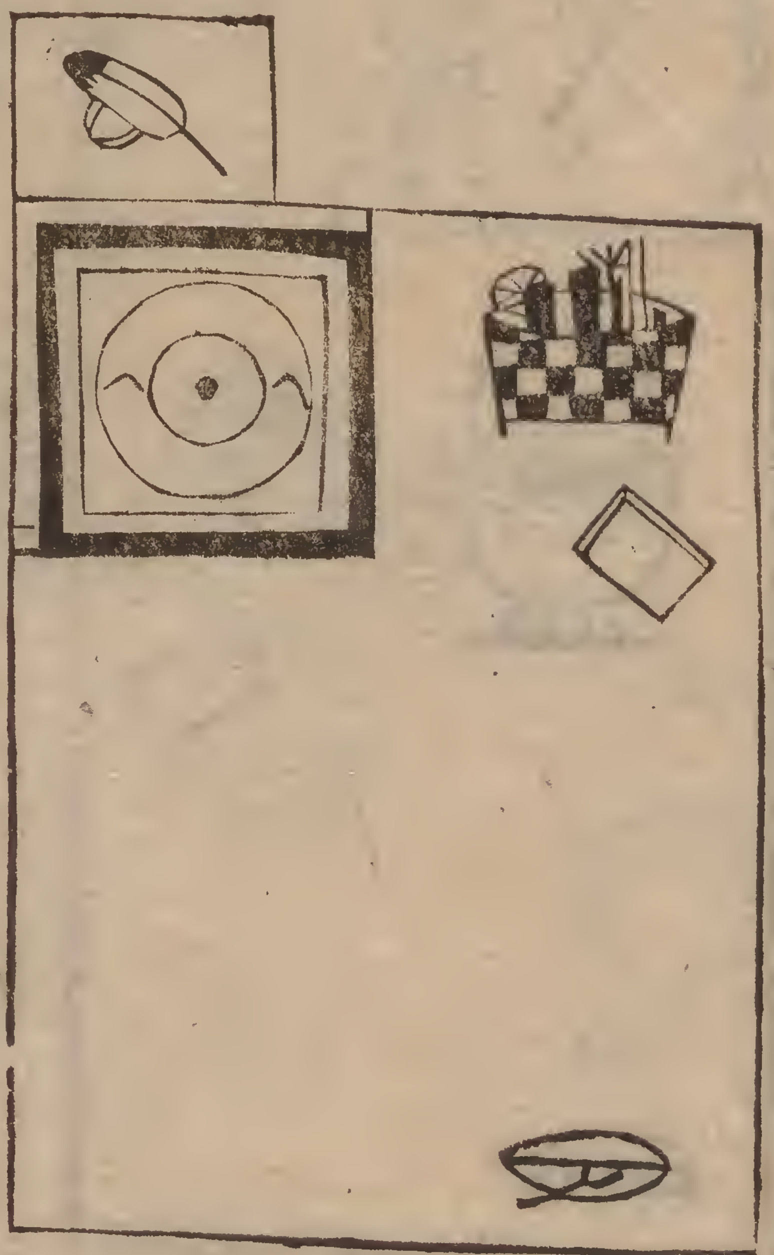


炉口満たるく取蓋をおれハ茶釜をかけれ炉
口の蓋をとれハあとのけふ取水を入かへさし炉口を



かけて水を入るあいだに風てたまれかふかりきと
炉口閉

一 扨て半右持手炭をまゐ
一 羽箒鐶たゝミへ上る時ハ炭入掻出下に置たる大羽
箒ハ後鐶の入時又ハ手燭ハ上るまでなし

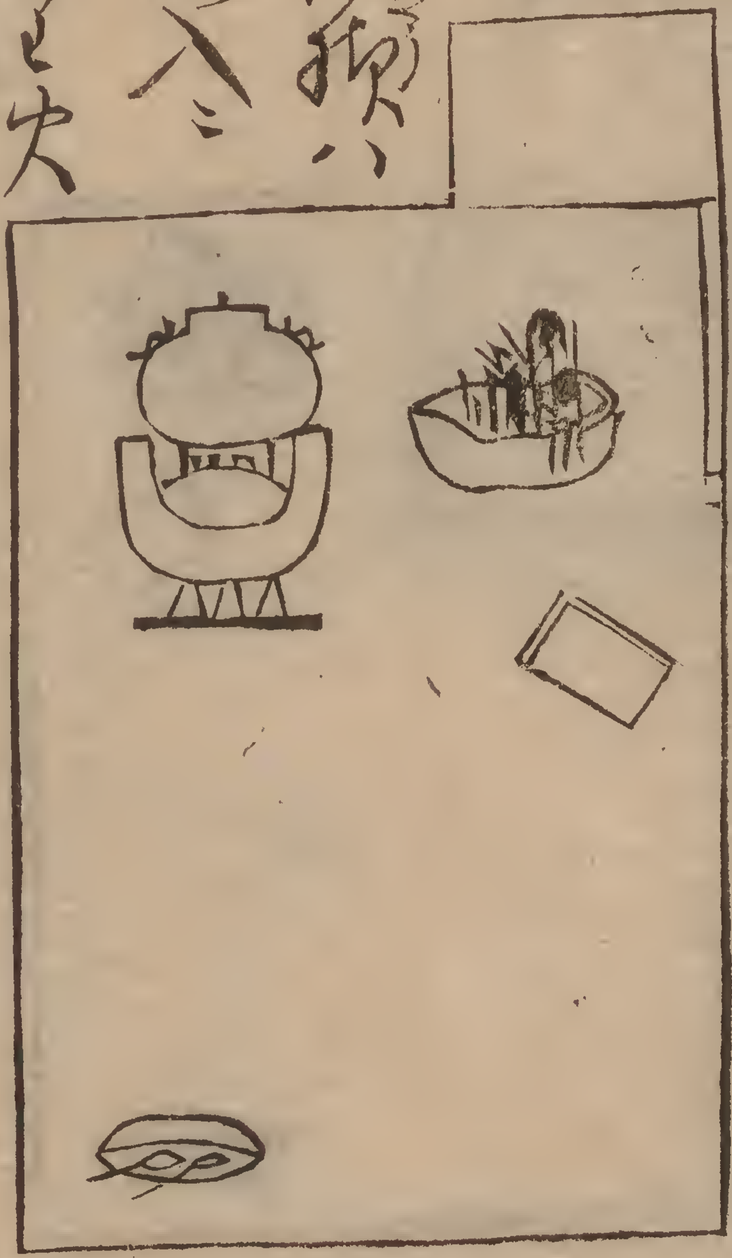


一 此炭ふあおれ仕様にかゝる事なし 釜ハ上にハ鐶手
此置上る座へ茶とよる時ハ土鍋とれかゝる事なし何と

一 風炉炭手前本勝手

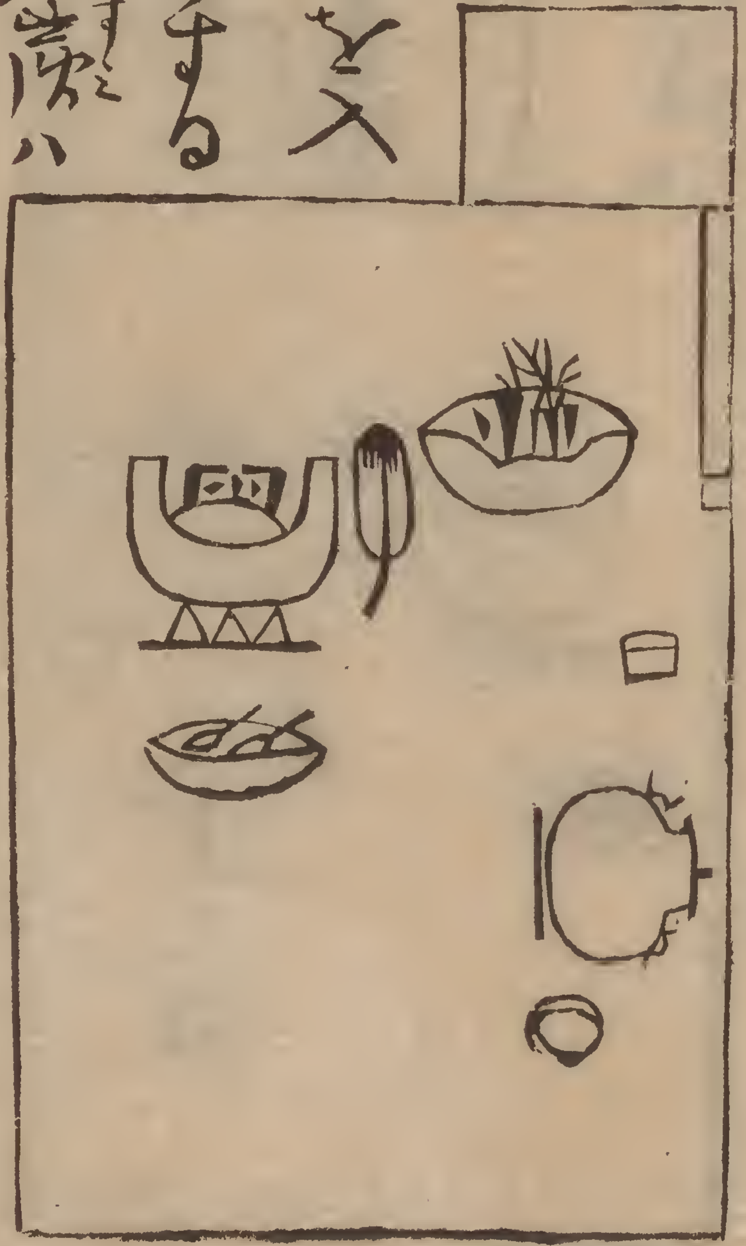
風炉の炭ハ釜入て炭するも更ともよろし又会席出て後の炭ハ　客方

するも更ともよろし
炭斗ハ道具の内
よし炭の組様ハ
何く通の炭入ニ
香合鐶なとも火



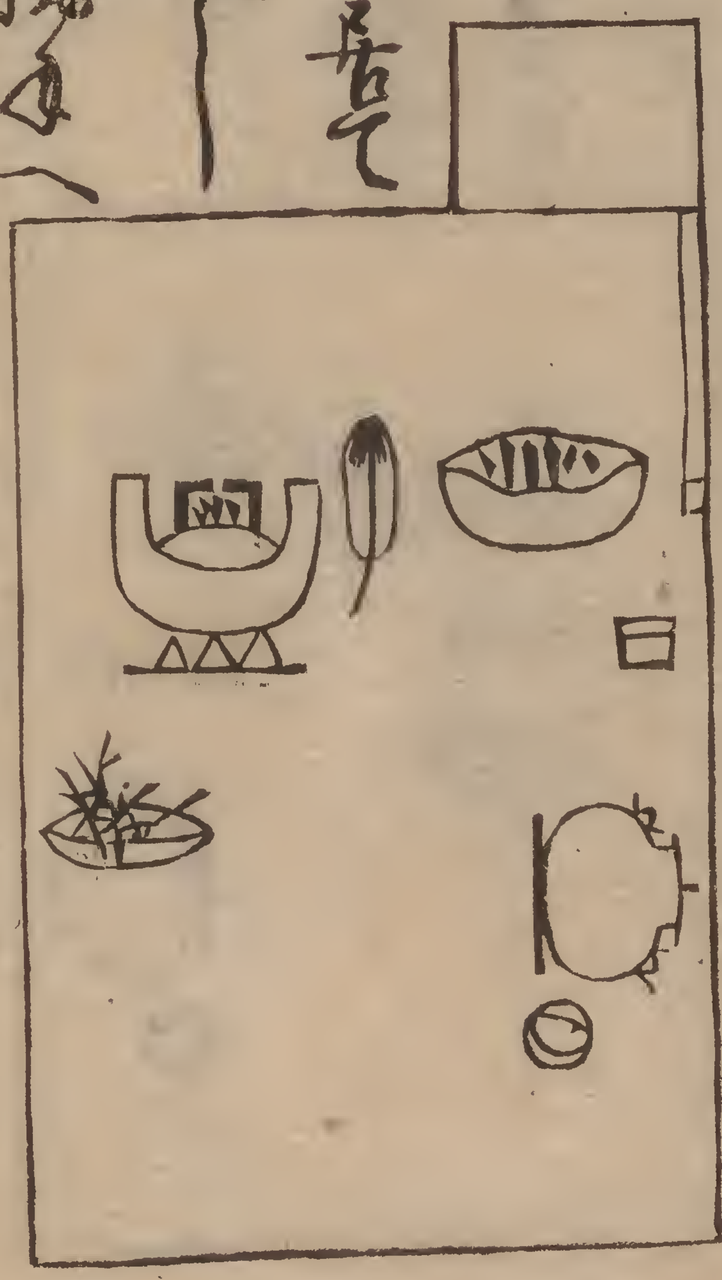
箸羽帚を掛出風炉の前通りに居置て土鍋
次ニ釜の蓋しめ羽帚にて蓋を掃下ろしおく
りけ次[illegible]の出しつゝ下ニ置後手の方の[illegible]に置

あるあけ方へ向ひ門出し手前ニ釜又居置羽
帚を取風炉掃ひ土鍋を取風炉のあとに灰撒く土
器の前の灰をとり後の方に置て又[illegible]を入て合
と組合にすれ
なくても口付土鍋
を脇へおき白炭を入
火箸をとり炭をする
扨て風炉の炭ハ



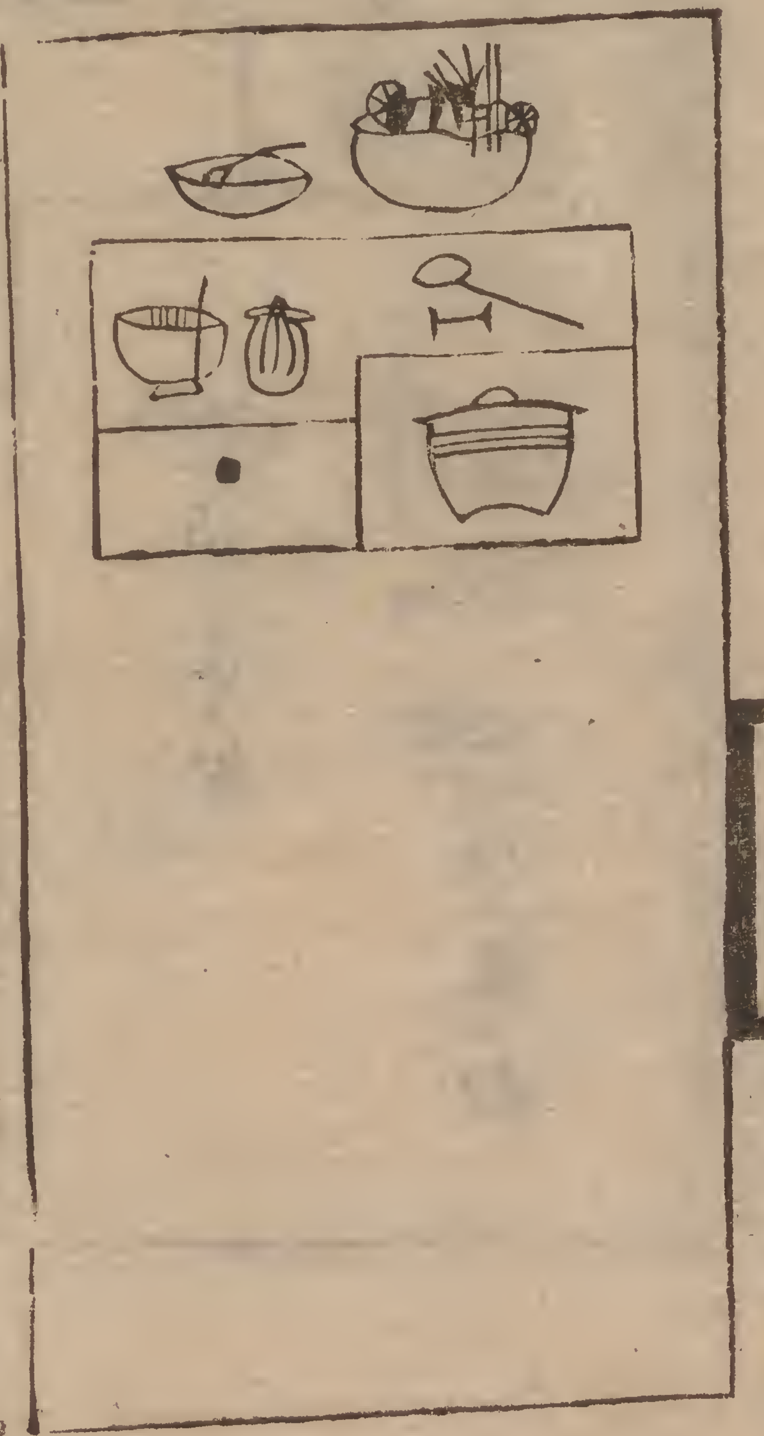
れくても入様てを客白炭入始る時分へつりて
土鍋を始くべ掛処へおしやし香合ハ右の方に置時
出て羽帚ハ本の処へおしやし釜へ向ひ蓋を取て

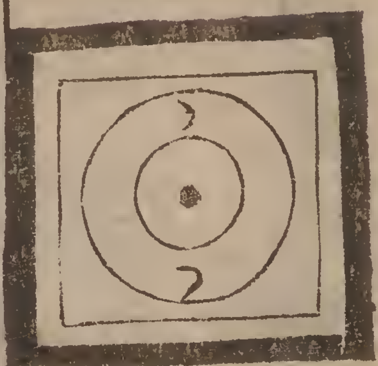
て持出へ置持出水さしを置く一段くすれば心
得し水ハ指せ其行口ハ手際之手数蓋置をおゐて
水次を取し行口を閉ぢ持て出へ出し釜を風炉の前へ
置の又持出し膝をつき
勝手の口をしくと置て
釜は縁を出し
鐶をかけ持出へ
出し土瓶を風炉の前へ出し一服は炭を出すとき
をも也土瓶持出へ出し又は其蓋をうけて香合を
取粉炭八持出の次に三所の酒は何度ハ手きはさ



一風炉は炭ハすミをすり円ハ人其炭のよき文なし
手数書を初口炭取出と置炭を取るまて置
一風炉は炭ハ釜は蓋へうつへて向をとりん直に炭の数
よまりが好く
一蓋は炭ハ釜
は蓋へ付置を置
へ炉風炉ハ付へて向
けん(まりが覚悟
一右持は其まゝかりゐる膝又なし膝は立持て
持出を立る之風炉をおたりもする風炉より又
置ふ同しなり

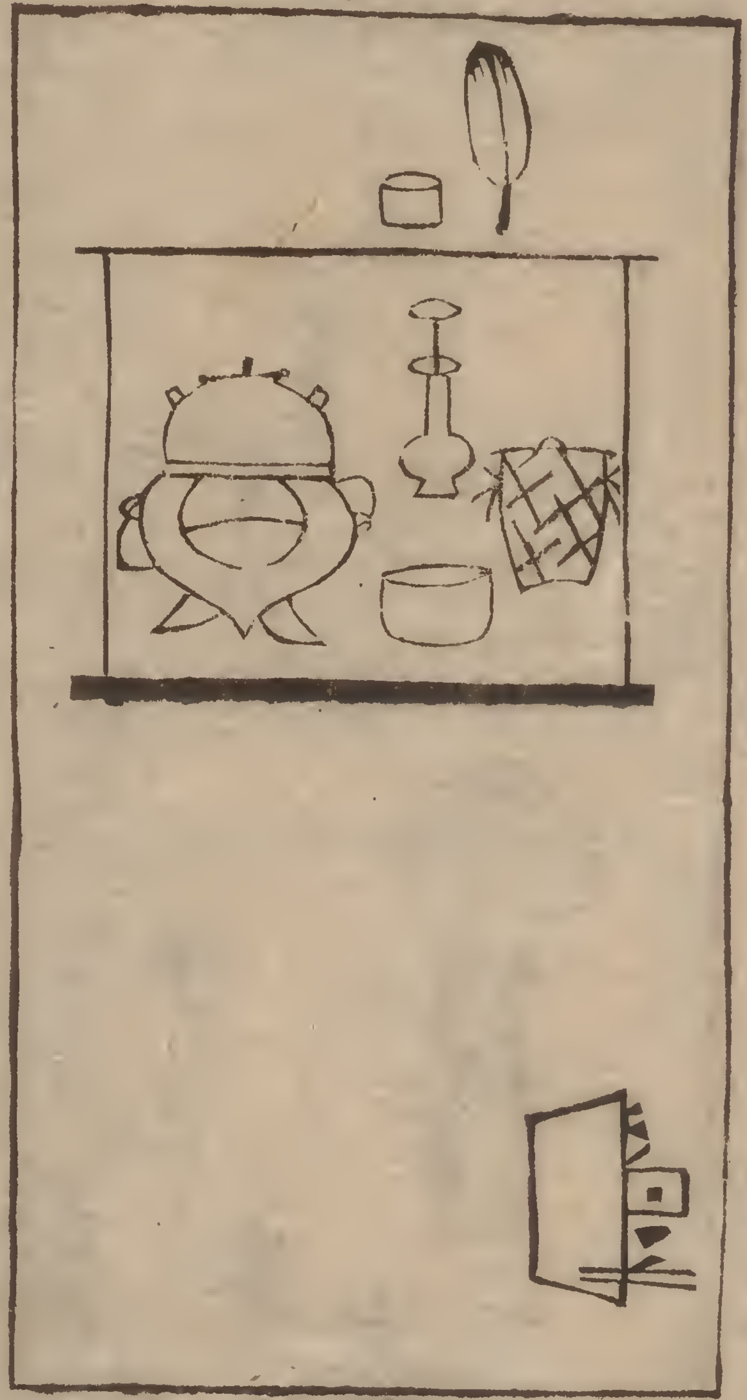
袋棚諸具荘也





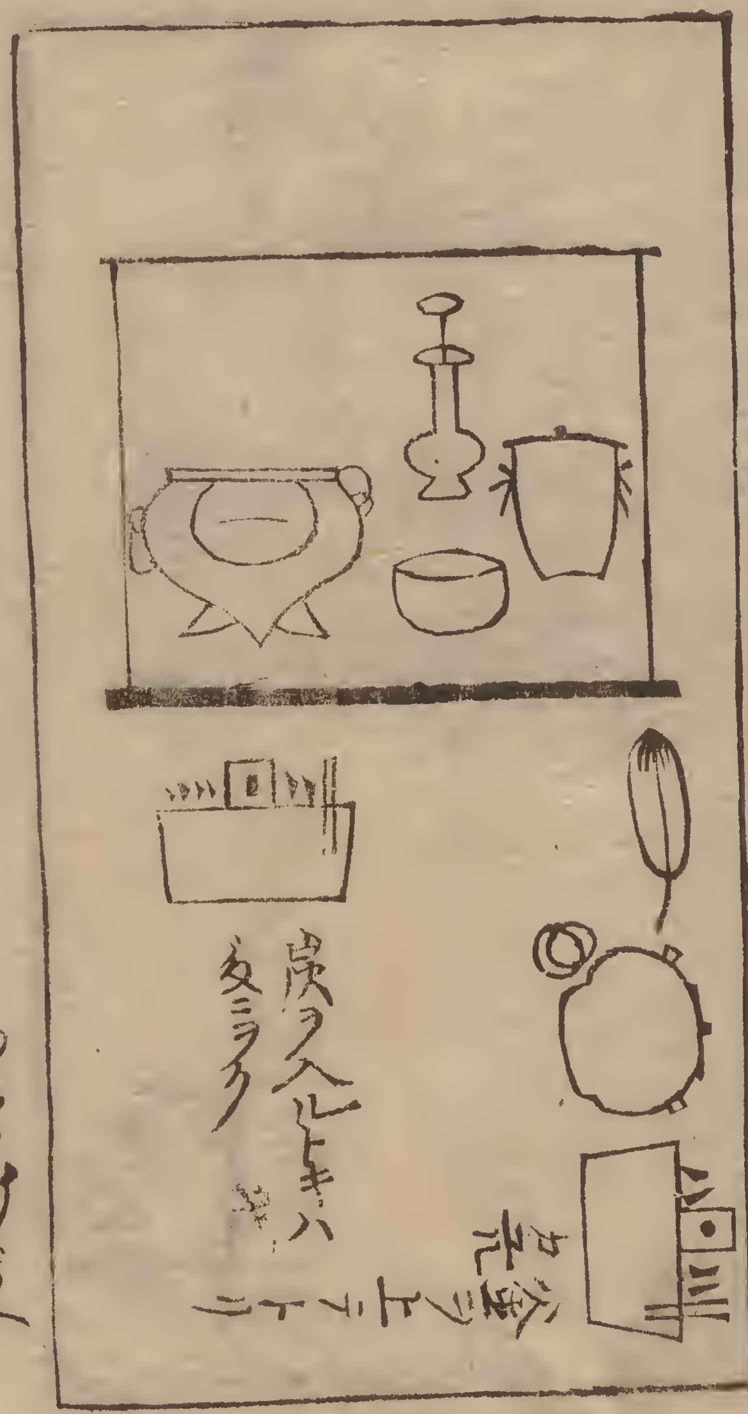
右は炭組て置ち風炉(ぬとき)茶巾(きやくよお)此はなすとすべくあとを薬罐(やかん)
よび諸(もろ)もろは廣座敷(ひろざしき)此荘(かざり)をはなれたかを立て上に
炭を組置(くみおき)て炭すり支度なること口傳

台子炭手前



一 台子炭手前は大概炭斗に入掛土(?)を置くとして炭のおき
時すみを次之内して置様よ所を切して炭手前
すんかり法よるき之後かへ此炭を入自炭於く支度

かし人れんる支よる故何んしいてはを深く
去氏釜れ上下ハ客ヘハ上テ好きつよすゝるなり

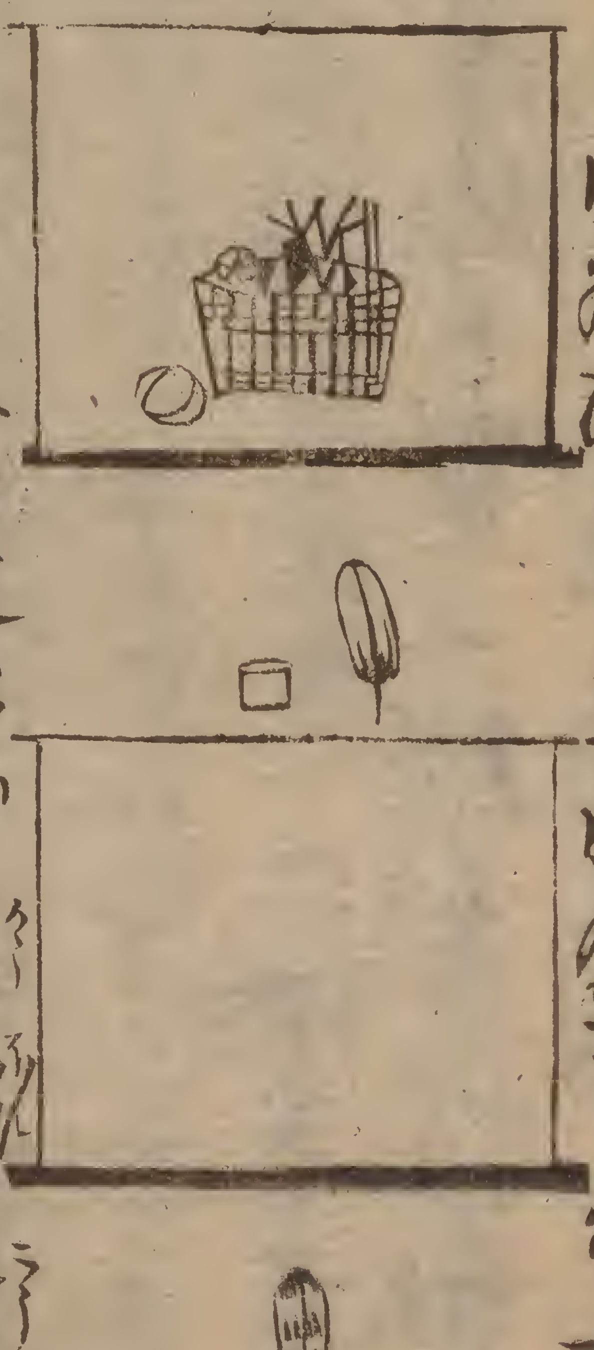


客方

炭斗を水指れかに置葉をはな土器あハあて付
きいにすり風炉れ右ん一方ハ上より見物かなり

炉其子炭おれ荘

一 茶壺ハ大きなる物ハ中立之後に飾しよくし故に入
よきに吸する菊水の外に荘り外ハ時れきちん挽すに
吸さる水指の外へ立水盤を出上に挽く炭茶碗



並すれる又上れたるに香盒香炉炭斗に置て必其
じ吹にじを立る高き所をすり茶釜へあるに
三井荘と針あり侍之先大法とる又

炭寸法之事

一 大炭長サ七寸小口壱寸八分より弐寸まで
一 胴炭長サ四寸小口弐寸より弐寸二三分
一 四寸五分四寸三寸五分三寸弐寸五分弐寸壱寸五分割炭
一 輪炭長サ一寸くし十八分くし十　くずすミ一寸五分
一 中炭割ハ六寸六分　一 細すミ七寸八寸九すミ九
炭俵ニ割ト有　一 割炭ひり炭弐寸五分切口
此たけ茸ハ惣炭ハ不入

風爐炭此寸法之事

一 二寸五分三寸くし十大小口壱寸　弐寸五分まで
一 割炭此小口一寸八分九分弐寸

一 一寸五分輪炭　炭ニ依て弐寸ほと

炉炭大体之事

一 角を切よ角ともに壱寸六分ハ古法也　壱寸八分ニ切
了ノ円むろうと角を八まハり外ハ六分ツヽ内四分
へ丸くしてまぎハすずし　但道具ニより口伝
一 大体ハ炭より爪まで三寸五分内ゟぼくする也
ち此よくすると爐此内ろくき時ハ弐寸八分二
すずし　自在鎖此時ハ釜此底より弐寸八分輪口
釜ハ爐縁より八分上て大体入　蝶口釜は炉縁より
壱分下て据物此据壱寸四分をわり据ニ大体と入
自在鎖ハ炉縁と内はひニ叩る程ニするなり

然して炉中下ケ所々ニ指口伝

風炉五徳伏様并土器寸法之事

一 五徳の爪より風炉の縁ちまで一寸六分位を

に依て口伝 五徳より土器の縁ちまで一寸五分

一 土器の灰より上ぶち下り一分二灰かけ様秘事 土器の内

おし付申也

一 土器置ニ五徳の角と土器の内かどと灰の外を

と見通し口伝

一 灰の仕様 一方山ニの時ハ一方谷の谷へ二つかせ

一方谷ニ川となし 又深くし 小き風炉ハ向を

ふり〇かけて猶り菓の様ニする 又風炉ハ済

は志れざると立て作るなり

一 風炉の灰ハ 炭の入の時ハ前の指置之時 指様灰

とおまわりせて 薬おとし見合置也

一 茶の風炉ハ土器ならおとぬて付て向をとる〇

なきも大焼の風炉の時ハ土と同じ

一 釜居紙寸法の事

一 長サ厚手九分 釜をかけ常の口紙

と同じ紙 色ハ白し 紙数十五六枚計ニすべし

一 茶炭の事

一 茶あて 割炭 胴炭 輪炭 白炭

也 茶炭ハ炭入の外へ向をおくも外ハ組合次第之

羽箒　鐶火箸　香合かざる

自炭所作の事

一囲炉裏ハ自炭の先の方を向へなしてかまと
おへすべし風炉ハ自炭先をおへしてかまと向へ
すべし

一自炭脈ハかまをかくる時ハ切と云習ひて炉きをる

一自炭かまをかくる時ハ灰を継るなり

炭壇の事

一十文字きりく　輪炭横にする事　割炭をならべ
たけくらべ　公儀をたてそむ　輪ノ上ニ余の炭を
あり一炭下ちよしの事

一客へ炭下ちよしの時ハ後炭の後にかくハ八寸に紙を
敷ここに掃出下ちよしすり也下火多き時ハ土圓
座候をして火箸をもて掃出下火をれ之後土圓の
内へ炉の灰をかへしる日の後にいふ也の炭す
ならべ同事掃出炉の向にまわし炭の後し一ちよくし
あおかれし立ついれ土圓へ入りは紙火箸くしまふ

ある炭の様の事す

一惣巾膝にをきて炭の掃大目へかつ之炭の手前へハ
をはする炭をあたにする同事先きのを出て膝に
一品の家とを時ちは候の参様に炭様の後
ならひ之是非と云時ちの様に治ちて御出をも一段

上重[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
て[illegible]之又向ニ[illegible]
[illegible]八[illegible]

一 除行口八蓋出ス[illegible]行口八蓋[illegible]ス
[illegible]行口[illegible]事
[illegible]事

一 [illegible]子八[illegible]
[illegible]八[illegible]